

## 三重県のコロナ禍における移住施策の実態に関する研究

EC 17047 藤原悠真

## 1. 研究の背景と目的

新型コロナウイルスが確認されてから約2年弱が経った。その中で、新型コロナウイルスの感染拡大を回避するために、企業には通勤抑制を、国民には外出を控える行動が要請された結果、従来の感染者数を大幅に減少させたが、それと引き換えに問題となっているのが飲食店や宿泊などの産業問題、特に大きな問題と言える地方部への地方創生に対する影響だ。新型コロナウイルスによって地方部は都市部からの流動人口が減り、観光客などの人の流動が抑えられ、地方部は様々な影響を受けている。それらを表している事例として三重県が挙げられる。理由として、三重県は大きく分けて北勢、伊賀、中勢、南勢、東紀州と分かれており、北勢、中勢や伊賀は都市部とのアクセスが整っている上に、地方創生がうまく進んでいる。しかし、観光地域でありながら過疎化が進んでいる南勢、深刻な過疎化問題を抱えている東紀州と各地域によって異なる。この研究において、エリアを三重県に絞り、移住者、相談者が増減した地域を調べ、各地域の移住施策の実態を明らかにすることを本研究の目的とする。

## 2. 研究の枠組み

### 2.1 研究対象地の概要

三重県の全市町を研究対象地とする。三重県は東海地方西南部に位置する県で人口は(2021年11月1日現在)1,755,693人である。三重県の29市町ある中で桑名市、四日市市、鈴鹿市、津市、松坂市、伊勢市の6市町で全体の70%弱を占めている。また、伊勢市を除き残りの5市町は北勢や中勢で、南勢や東紀州は深刻な過疎化が進んでいるのが現状だ。移住施策は多くの都道府県や市町村で行われているが、三重県では県内の29市町による政策への取り組み方や移住への重要性が大変異なる。南勢や東紀州では過疎化という社会問題の観点から、観光業に力を入れ、特に移住施策に取り組んできた。それら

が新型コロナウイルスによって人口の流動が抑制された状況により、地域復興への影響を受けている。

### 2.2 研究方法

コロナウイルスがもたらした都市部から地方部への流動傾向に焦点を置き、人の従来の流動スタイルがコロナ禍で変わったのではないかとこのころに着目した。まず、三重県庁が行った2019年の2020年の移住者数、相談者数データからどの地域で増加、減少したか、どの地域からの移住者が増加、減少したのかをまとめた。また、三重県の全市町へヒアリング調査を行い、移住に対する各地域の特徴を表にまとめた。その結果、北勢、伊賀、中勢、南勢、東紀州の区域で移住施策の取り組みや重要性の違いが見えてきた。それらからさらに実態を深めるために、移住者や相談件数も多く、移住施策に対して盛んに取り組んでいた伊賀地域、観光地域でありながら深刻な過疎化が進んでいる南勢、東紀州地域(計14市町)にアンケート調査を行なった。その後、アンケート結果をまとめるために、2019年(コロナ前)、2020年(コロナ禍)2021年の相談件数と移住者数、各地域の移住者の立地の傾向を表にまとめた。また、各地域の移住施策の違い、相談者と移住者の属性、コロナ前、コロナ禍での移住者、相談者の変化も表にまとめ、結果を結論に記した。

## 3. 三重県のコロナ禍での移住活動実態

### 3.1 年代別で比較した三重県の移住の全体像

三重県庁が行った移住統計データから、コロナ前とコロナ禍の2019年と2020年の着目し、年代別で比較した三重県の移住者数と相談者数の増減、コロナ前とコロナ禍での各地域の増減を調べた。

### 3.2 年代別で比較した三重県の移住者数と相談者数

統計データから2019年の移住者数が383人、2020年が514人と約150人増加していることがわかる。しかし、相談件数は2019年が1455件、2020年が1098件と約350件減少していることがわかった。

### 3.3 コロナ前とコロナ禍での各地域の増減

2019年（コロナ前）の移住者数は北勢40人、中勢99人、南勢58人、伊賀121人、東紀州65人で2020年（コロナ禍）の移住者数は北勢68人、中勢131人、南勢71人、伊賀175人、東紀州69人となった。減少した地域はなく増加した地域ばかりだが、伊賀地域は約50人ともっとも増加した地域である。また、2019年（コロナ前）の移住前の地域では、関東87人、東海84人、近畿164人、その他46人で2020年（コロナ禍）の移住前の地域では、関東108人、東海137人、近畿211人、その他58人となった。やはり三重県付近の地域が多いことがわかった。

### 3.4 移住者数と相談者数、各地域の関連性

これらの関係性として、コロナ前の2019年に移住先に相談をし、コロナ禍である2020年に移住を決断した。移住先である伊賀や中勢に移住者が集中しているのは、東海や近畿または都市部へアクセスが良好な地域に集まりやすいからと考えた。

## 4. 各市町へのヒアリング調査

### 4.1 ヒアリング調査の概要

三重県の各市町の移住活動を知るため、各市町へ「コロナ前と現在の移住施策や取り組み」と「コロナ禍で変化した移住施策」について調べた。

### 4.2 ヒアリング調査の対象者

三重県の全市町(2022年現在29市町)を対象地域とし、各市町の企画課、地域課、まちづくり推進課などに電話調査を行った。

### 4.3 ヒアリング結果（回収率29/29）

#### 4.3-1 「コロナ前と現在の移住施策と取り組み」

「コロナ前と現在の移住施策と取り組み」についての活動の中身は、表1から表5の通りである。表1から、北勢は日本三大都市圏の愛知県近郊ということもあり、地方創生はうまく進んでおり、移住政策に取り組むというよりは、現在いる地域住民への交通整備や環境づくりに励んでい

表1 北勢地域の活動

いなべ市	変化はなし。オンラインの取り組みのみ。
東員町	県外からの移住者は少ない。
桑名市	変化はなし。相談会でオンラインの実施。
木曽岬町	変化はなし。
朝日町	変化はなし。
川越町	近隣の市町からの移住者が主。
四日市市	移住者に変化なし。相談件数は増加傾向。
菰野町	主な変化はなし。
鈴鹿市	オンラインの活用など。
亀山市	移住ネットと、移住フェアに参加する程度。

た。また、表2の伊賀は都市部（愛知、大阪）への交通アクセスが良好で移住政策にも取り組んでおり、結果からも移住者、相談者が増加していた。また表3から、中勢は県の間接地に位置するため各地域へのアクセスが整っており、人口も集中している地域になる。そのため、移住政策に取り組まなくても、すでに地域住民で満たされていた。それから、表4の南勢は観光地域でありながら過疎化問題の現状を抱えている。結果から分かるように上記の3つの地域に比べ移住政策に取り組んでいるが都市部との繋がりというよりも地方特有の自然環境に恵まれているため、都市部へのアクセスというところでは他の地域に劣るのではと考えた。そして、表5の東紀州も観光地域でありながら、三重県の最南部に位置するため、都市部へのアクセスも困難で深刻な過疎化が進んでいるのが現状だ。そのため、都市部との流動が遮断されたコロナ禍で地方創生の被害を一番受けているのはこの地域であると考えた。

表2 伊賀地域の活動

伊賀市	オンラインの活用、今年6月にはオンライン移住フェスティバルに参加、相談件数の増加。
名張市	名張市オンライン移住相談、近畿地方の方々の移住、相談、またUターンでの件数も増えた。

表3 中勢地域の活動

津市	変化なし。
松坂市	相談件数は上昇傾向にある。
明和町	相談件数は多少増えたが、あまり変化はない。
多気町	移住者は昨年より増加したが、数人程度
大台町	県内の方へ対面での登録、相談、物件の内覧。

表4 南勢地域の活動

玉城町	Zoomを用いた交流やオンラインの活用。
伊勢市	伊勢移住パンフレットの作成、オンラインの実施やYouTubeチャンネルでの移住促進。
鳥羽市	オンラインコミュニティサイトを作成。
志摩市	2020年には21世帯45人だった。これは去年からの2倍に当たる。
度会町	町のポータルサイトを作成、近隣市町村との合同オンライン移住相談会。
南伊勢町	Zoom等で空き家バンクの内覧。
大紀町	相談件数増加傾向、県内の方への対面実施。

表5 東紀州地域の活動

紀北町	オンラインでのプロモーションなど。
尾鷲市	オンラインでの移住相談、空き家の内覧、相談件数や移住者は横ばい。
熊野市	都市部の方からの相談は多い。
御浜町	例年の相談件数30件がコロナ禍で90件。年間約10名の方が移住している。
紀宝町	オンラインでの相談会など。

#### 4.3-2 「コロナ禍で変化した移住施策」

「コロナ禍で変化した移住施策」についての活動の中身は、オンラインの活用、WebサイトやYouTubeの開設、県内の方のみの移住体験など工夫しながら活動が行われているのがわかった。これらの活動は、ほとんどの市町で行われていた。

## 5. 各市町へのアンケート調査

### 5.1 アンケート調査の概要

移住活動の実態を探るべく、三重県庁の統計データとヒアリング調査から、移住者が集まり地域としても積極的に移住に取り組んでいる伊賀地域(図1)、観光地域ながら過疎化問題を抱えている南勢(図2)、東紀州地域(図3)の3つの地域に着目した。



図1 伊賀地域 図2 南勢地域 図3 東紀州地域

### 5.2 アンケート調査の対象者

伊賀地域、南勢地域、東紀州地域の企画課、地域課、まちづくり推進課などを対象とした。

### 5.3 アンケート結果

回収率は伊賀 2/2、南勢 4/7、東紀州 5/5 である。

#### 5.3-1 各地域の相談件数と移住者数の違い

表6のデータから、2019年(コロナ前)と2020年(コロナ禍)の移住者を比較した時、増加した地域は、伊賀地域(伊賀市、名張市)と南勢地域(志摩市)、東紀州地域(熊野市)である。さらに、2019年(コロナ前)と2020年(コロナ禍)の相談者を比較した時、増加した地域は伊賀地域(伊賀市)、南勢地域(志摩市)、東紀州地域(紀北町、熊野市、御浜町、紀宝町)である。これらから、2019年(コロナ前)と2020年(コロナ禍)を比較して、移住者と相談者の両方が増加した地域は伊賀市、志摩市、熊野市であり、3つの地域に共通していえることが観光地域であることだ。それぞれの地域に特徴と言える観光地があり、

表6 年代別移住者数、相談者数

地域/人	移住者			相談者			
	2019	2020	2021	2019	2020	2021	
伊賀	伊賀市	88	94	58	1,105	1,236	676
	名張市	64	113	不明	323	227	不明
南勢	鳥羽市	37	25	16	不明	不明	不明
	志摩市	20	45	不明	93	120	不明
	南伊勢町	42	32	15	168	151	96
	大紀町	19	15	不明	不明	不明	不明
東紀州	紀北町	不明	不明	不明	62	74	53
	尾鷲市	31	31	22	1,252	1,057	308
	熊野市	10	23	14	319	698	不明
	御浜町	33	33	43	95	121	81
	紀宝町	26	18	22	16	31	20

伊賀は伊賀流忍者博物館、志摩は志摩スペイン村、熊野は熊野古道である。これらの結果が移住に関連しているのではと考えた。

### 5.3-2 各地域の移住者の居住立地傾向

表7から、伊賀と南勢、東紀州では地域の周辺環境によって変わることがわかった。伊賀は周辺に海岸地帯がないことから市街地、旧集落地帯や田園地帯に人が集まっていた。また、南勢は市街地、山林、田園地帯や海岸地帯周辺と市街地を除き周辺に自然環境が整っている地帯に人が集まっていた。同様に、東紀州でも同じことが言える。旧集落地帯を除き山林、田園地帯や海岸地帯周辺と地域によって移住者が求める立地傾向は違うことが明らかになった。その結果、5.3-1で述べた「観光地がある地域に移住者が集まりやすい」は、周辺環境が整っている上で成り立っていると考えた。周辺環境というのも自然環境のことで、都心では味わえないような地方特有の自然に囲まれた生活と、休日に観光地へ出かけるというライフスタイルを求め、その条件に合う伊賀市、志摩市、熊野市に集まっているとわかった。

表7 各地域の立地傾向

地域属性/市町数	伊賀	南勢	東紀州
中心市街地	1	2	0
戦前に形成された市街地	0	0	0
戦後に形成された市街地	1	0	0
旧集落地帯	1	0	2
景勝地域	0	0	0
観光地域	0	0	0
山林地帯	0	1	1
田園地帯	1	2	2
海岸地帯周辺	0	3	2
その他	0	0	0

### 5.3-3 各地域の移住政策

表8から、伊賀地域は移住政策に関してサポートが充実していることがわかるが、南勢、東紀州地域は政策への取り組みが各市町によって異なっていた。本来、地域を問わず全市町が項目欄にある政策を行なっていれば良い話だが、空き家の現状や地域の金銭面なところで難しくなっている。しかし、移住政策が多い地域に移住者が集まっているのは現状だ。伊賀地域の伊賀市、名張市はほとんどの政策を行なっており、移住者が多いことと関連していると言えるだろう。

表8 各地域の移住政策

政策/市町数	伊賀	南勢	東紀州
空き家バンク	2	4	5
求人バンク	0	1	0
移住サイト	2	3	5
新築取得補助金	0	2	3
中古住宅取得支援金	1	2	1
空き家リフォーム事業補助金	2	2	3
空き家リノベーション事業補助金	2	1	3
移住体験セミナー	1	3	2
移住体験ツアー	2	3	3
企業支援	1	2	0
就労支援	2	2	4
就農支援	2	1	3
移住相談専用窓口	2	2	2
ワンストップ移住相談窓口	2	3	3
若者子育て支援金	2	1	0
子育て支援金(全世帯対象)	2	1	0
子供医療費助成制度	2	4	3
風景づくり助成金	0	0	0
結婚新生活支援事業	0	1	1
(%)	71%	50%	43%

5.3-4 各地域の移住者と相談者の属性

表9から分かる通り、全ての地域において30代以上の会社員や自営業の方の移住者、相談者が多い。しかし、全ての地域で20代の若者の移住者、相談者は0であった。これは、過疎化が進んでいる南勢や東紀州地域において非常に深刻な問題と言えるだろう。また、全ての地域の移住者、相談者が三重県付近の中部、近畿の方が多くことから、いつでも帰郷できる環境に移住を考え、また実際に移住を行っていると考えた。それから、関東の方からも全ての地域にお

いて移住者、相談者が多いことがわかる。その理由として、5.3-2で述べた「都心では味わえないような地方特有の自然に囲まれた生活」を求めていることから、増加したのではと関連付けた。

表9 各地域の属性

伊賀地域 (単位:市町数)								
年齢別		職業別			地域別			
年齢	移住者	相談者	職業	移住者	相談者	地域	移住者	相談者
20代	0	0	会社員	2	2	北海道	0	0
30代	2	2	公務員	0	0	東北	0	0
40代	1	0	自営業	2	2	関東	2	2
50代	1	2	主婦	0	0	中部	2	2
65歳以上	2	1	学生	0	0	近畿	2	2
			求職中	0	0	中国四国	0	0
			定年後	0	0	九州	0	0
			年金	1	1	三重県内	0	0
南勢地域 (単位:市町数)								
年齢別		職業別			地域別			
年齢	移住者	相談者	職業	移住者	相談者	地域	移住者	相談者
20代	0	0	会社員	1	2	北海道	0	0
30代	4	3	公務員	0	0	東北	0	0
40代	1	0	自営業	2	2	関東	3	2
50代	4	3	主婦	0	0	中部	2	1
65歳以上	3	3	学生	0	0	近畿	4	3
			求職中	1	1	中国四国	0	0
			定年後	1	1	九州	1	1
			年金	0	0	三重県内	1	1
東紀州地域 (単位:市町数)								
年齢別		職業別			地域別			
年齢	移住者	相談者	職業	移住者	相談者	地域	移住者	相談者
20代	0	0	会社員	3	3	北海道	0	0
30代	4	3	公務員	0	0	東北	0	0
40代	4	4	自営業	4	4	関東	2	4
50代	3	3	主婦	1	1	中部	3	5
65歳以上	1	2	学生	0	0	近畿	3	5
			求職中	3	3	中国四国	0	0
			定年後	0	0	九州	0	0
			年金	1	1	三重県内	0	0

5.3-5 コロナ前、コロナ禍の移住者、相談者の変化

表10のコロナ前(2019年)とコロナ禍(2020年)での変化について、ほとんどの地域が「少し変化した」と答えた。その理由として、コロナウイルスによる都市部から地方部への流動傾向の変化が考えられる。コロナ前の都市部から地方部への流動傾向は観光業や宿泊業が多かったが、コロナ禍では観光業と宿泊業では流動人口を得られなくなった。つまり、従来の流動傾向が地方部に機能しなくなった今、次の流動傾向は移住による流動人口の増加と考える。また、今回行なったアンケートの「どのようにコロナ禍で変化したか(年齢や職業などの属性)」からも、多くの地域が「都市部からの移住者、相談者が増え、フリーランスの方やリモートで勤務可能な方が短期移住を行なっている」と答えた。コロナ禍

で都市部から地方部への移住を希望している方が多く、都市部での忙しい日々から地方部へのゆっくりした生活を求め、フリーランスの方やリモートで勤務可能な方が単年や期間限定移住を用いて移住を行なったために、移住者が増加したとわかった。

表10 各地域の変化

変化度/市町数	伊賀	南勢	東紀州
かなり変化した	0	0	0
少し変化した	2	3	5
変化なし	0	1	0
わからない	0	0	0

6. 考察

コロナ禍において移住者、相談者が増加した地域と減少した地域があるとわかった。移住者が増加した地域には、観光地があり、移住政策が多く取り組まれており、周辺には整った自然環境があった。特に移住者、相談者が集中していた伊賀市では、地方特有の自然に囲まれた生活と近辺に観光地があり、移住政策が整っていたことが挙げられる。それと反して減少した地域には、移住政策が少なく、観光地も少ないため、減少したと考えた。また、コロナウイルスによる移住への影響はほとんどの地域が「少し変化した」と答えた。これらの理由として、コロナ禍で都市部から地方部への移住を希望している方が多く、都市部での忙しい日々から地方部へのゆっくりした生活を求め、フリーランスの方やリモートで勤務可能な方が単年や期間限定移住を用いて移住を行なったため、移住者が増加したとわかった。

7. 結論

コロナ禍でも移住者が増加した地域と移住者が移住地域に求める条件の関連性として、観光地があり、移住政策が多く取り組まれており、周辺には整った自然環境がある地域と結論づけた。

参考文献

- 1) 三重県戦略企画部企画課, 三重県まち・ひと・しごと創生総合戦略改正版,  
<https://www.pref.mie.lg.jp/common/content/000776826.pdf>, (2021-08-15)
- 2) 三重県戦略企画部広聴広報課, 三重県、全国の地方移住経験者に対する意識調査を実施,  
<https://kyodonewsprwire.jp/release/202003248363>, (2020-09-06)



## 新社会人の居場所・サードプレイスに関する研究

### ～現実世界と仮想世界の間で～

EC 17049 星野 圭吾

#### 1. 研究の背景と目的

ストレス社会の日本はサードプレイス（以降、省略するときはサードプレイスを TP とする。）の理解の風潮が少ない。しかし、地域コミュニティの弱体化が問題視されている中、TP は今後益々必要になり、地域活性化の核として期待が高まっている。そんな中、マイプレイス型の TP などの概念が重要視されるようになり、SNS の普及により、現実世界だけではなく仮想世界という新しい形の TP が形成された。またコロナ禍により外出の機会が減少し、自宅に滞在する時間が増えたことにより、自宅にいながらも仮想世界に身を置くことで TP が形成される。ネットや技術の発展により、今までの現実世界の TP だけではなく仮想世界の TP も多数存在するようになった。まちづくりの議論では交流型 TP ばかりに視点がいきがちでマイプレイス型が重要視されないが、本研究では新社会人（20 代）を研究の対象として、仮想世界の TP を調べ、現実世界とのつながりを明らかにすることを目的とする。このことにより、現代の TP の形を知り、彼らの悩み・ストレスを少しでも和らげるためのきっかけに繋げることができる。

#### 2. 研究の枠組み

##### 2.1 研究対象

新社会人 20 代を本研究の対象とし、比較対象として 30 代以降の社会人への調査も行った。また、現実世界と仮想世界の TP も研究対象とした。

##### 2.2 研究方法

研究方法としては、現実世界と仮想世界の TP に関する資料やデータ、新社会人（20 代）が抱える悩み・ストレスに関するデータを入手し、基本情報

の把握と整理を行った。さらに、研究対象である新社会人（20 代）を対象にしたアンケートを実施することで、彼らの仮想世界の TP の考え方、また、実際に現在利用している場所（現実世界）を調査した。具体的な調査方法としては、Google Form でアンケートを作成し、新社会人が多く集まる名古屋駅や栄周辺で配布した。他に、都市建設と関係する新社会人に調査を依頼した。また、SNS などを利用してランダムにアンケート配布を行った。最後に Google Form でアンケートを実施して集まった回答のデータを分析し、現実世界と仮想世界の TP の主な利用目的や利用されるものの傾向を分析した。

#### 3. ゲームアプリ・SNS の分析

仮想世界のサードプレイスの理解を深めるため、SNS やゲームアプリといった人々が関わり合える環境がある分野について調査を行う。主要 SNS の 2016 年から 2019 年の MAU 数（月に 1 回以上利用や活動があったユーザー数）をみると、Facebook は 2019 年に MAU 数が下がってしまったが、それ以外の SNS は MAU 数が増加傾向にあることがわかる。利用ユーザー数が増加傾向にあることがわかる。（図 1）

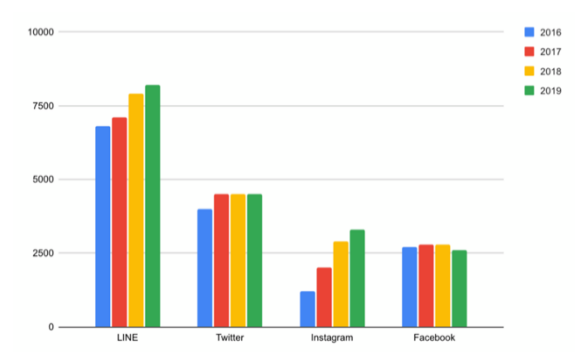


図 1 主要 SNS の MAU 数の推移

利用頻度の高い SNS の MAU 数をまとめる。(表 1) 日本の人口が約 1 億人なのを考慮すると、表 1 を見ると多くの人が SNS を活用していることがわかる。

表 1 各 SNS の MAU 数

	MAU数
Facebook	2600万人
Twitter	4500万アカウント
Instagram	3300万人 (以上)
LINE	8900万人
YouTube	6500万人
TikTok	950万人

ゲームアプリは MMORPG といった人との交流が図れるものを主に調査した。MMORPG とは「大規模多人数同時参加型オンライン RPG」のこと。人口が多い人気スマホ MMORPG を示す。(表 2)

表 2 MMORPG プレイ人口数

ゲームタイトル	プレイ人口
Goddess	8000万人
アヴァベル	1200万人
剣と魔法のログレス	900万人
イルーナ戦記	800万人
トーラム	700万人
ミトラスフィア	400万人
黒騎士と白の魔法	400万人
オルクスオンライン	300万人
イザナギオンライン	300万人
リネージェ2	200万人

4. サードプレイスに関するアンケート分析

本研究に関するアンケートで 75 名から回答を得た。研究対象である 20 代では男性が 24 名、女性が 25 名、比較対象である 30 代以降では男性が 20 名、女性が 6 名から集まった。(表 3)

表 3 各年代の男女比

	20代	30代以降	総合計
男性	24名	20名	75名
女性	25名	6名	

普段から仲のいい人の有無を聞いた。(表 4) 知り合いや、友達の数とは違い、仲のいい人となるとなんでも話せる人などと限られてくるのでどの年代

も数が限られてくる。また、普段から仲のいい人とのコミュニケーションをとる方法や場所で 20 代と 30 代以降での大きな違いはあまりなく、主に 20 代は SNS でのやりとりが多く見られる。(表 5) しかし 30 代以降を見ると居酒屋で仲のいい人とコミュニケーションを取ることが一番多い。これは仮想世界でのやりとりよりも直接会ってコミュニケーションを取ることが 20 代よりも好まれることがわかる。

表 4 各年代の仲のいい人の有無

	20代		30代以降	
かなりいる	6名	12%	1名	4%
多少いる	35名	71%	13名	50%
あまりいない	7名	14%	11名	42%
いない	1名	3%	1名	4%

表 5 仲のいい人とのコミュニケーション方法・場所

	20代		30代以降	
現実世界				
カフェでお茶をしながら	17名	34%	4名	15%
居酒屋に行く	16名	32%	13名	50%
飲食店に行く	2名	4%		
公園で話す	1名	2%		
スーパー銭湯	1名	2%		
家で話す	1名	2%		
遊びに行くなど	1名	2%		
職場でコミュニケーションを取る	1名	2%		
仮想世界				
LINEで話す	34名	69%	12名	46%
SNSでやりとり	20名	40%	5名	19%
電話で話す	15名	30%	4名	15%
ゲームのチャットで話す	3名	6%	1名	3%
ZOOMで飲み会	1名	2%	2名	7%
Discord			1名	3%

表 6 悩み・ストレスの打ち明け方法や場所

	20代		30代以降	
現実世界				
居酒屋	17名	34%	15名	57%
友達の家	15名	30%	1名	3%
カフェ	12名	24%	4名	15%
ドライブ	3名	6%		
公園	2名	4%	1名	3%
会社	2名	4%	6名	23%
家族に相談	2名	4%		
飲食店	1名	2%		
自己解決	1名	2%		
悩み・ストレスを考えない	1名	2%		
自宅			5名	19%
誰かに直接会う			1名	3%
家族以外には打ち明けない			1名	3%
仮想世界				
LINE	26名	53%	12名	46%
電話	25名	51%	13名	50%
SNS	14名	28%	3名	11%
ZOOM			1名	3%

悩み・ストレスの打ち明け方や解消方法では、20 代は SNS が中心的に使用されることが多く、30 代以降では直接会話ができる場面や SNS による方法といった

ばらつきが見られる。

悩み・ストレスの打ち明け方法や場所を普段から仲のいい人とのコミュニケーション方法の表と比べてみると、類似している点がある。やはり気軽に人とのコミュニケーションをはかれる方法としてLINE、電話やSNSはかなりの人が利用していることがわかる。30代以降に関しては20代とは違い、直接会うことを重要視していることがわかる。悩み・ストレスの解消方法ではどの年代も1人で解消する方法と誰かに助けてもらう方法をバランスよく使用している。(表6、7)

表7 悩み・ストレスの解消方法

	20代		30代以降	
現実世界				
お酒を飲む	14名	28%	15名	57%
自分の好きなお店に行く	14名	28%	10名	38%
スポーツをする	10名	20%	6名	23%
散歩をする	7名	14%	3名	11%
悩み・ストレスを解消する特定の場所がある	4名	8%		
ジムに行く	3名	6%	3名	11%
寝る	2名	4%		
公園に行く	2名	4%	2名	7%
自己解決	2名	4%		
映画鑑賞	1名	2%		
バイクに乗る	1名	2%		
ジョギングをする	1名	2%	4名	15%
ショッピング	1名	2%		
タバコを吸う	1名	2%		
ギャンブル	1名	2%		
遊びに行く	1名	2%		
ゴルフ	1名	2%		
サイクリングをする			1名	3%
ピアノを弾く			1名	3%
人と喋る			1名	3%
仮想世界				
YouTubeを見る	23名	46%	4名	8%
友達と電話をする	21名	42%	5名	10%
SNSを見る	17名	34%	4名	8%
LINEをする	15名	30%	5名	10%
オンラインゲーム	7名	14%	4名	8%

悩み・ストレスの解消方法で自分の好きなお店に行く、または悩み・ストレスを解消する特定の場所がある人にその場所を聞いた。(表8)

表8 具体的な場所

	20代	30代以降
カラオケ		買い物
自然が多いところ		旅行に出かける
バイクで走って楽しめる道や景色のいいところ		自宅
岐阜基地		山・海
温泉		温泉、登山、ドライブ
景色の綺麗なところ		音楽が聴ける場所、書店
コンサート		
美術館		
東京の好きな場所		
家		
地元にある山		
劇場		
美容室		
ゴルフ場		

社会人になってからの悩み・ストレスは圧倒的に人間関係や環境の変化が多くなっていく。特に20代と30代以降で目立って多いのが、職場での人間関係と生活習慣の変化になっていく。(表9)

表9 社会人になってからの悩み・ストレス

	20代		30代以降	
職場での人間関係	27名	55%	13名	50%
生活習慣の変化	21名	42%	12名	46%
友達や恋人になかなか会えない	15名	30%	2名	7%
給料	15名	30%	5名	19%
通勤時間の長さ	8名	16%	2名	7%
交友関係	6名	12%	2名	7%
飲み会の誘い	6名	12%	4名	15%
接客対応	1名	2%		
人の悪いところ	1名	2%		
業務内容	1名	2%	2名	7%
キャリアプラン	1名	2%		
バイクに乗る時間が減った	1名	2%		
テレワーク	1名	2%		

社会人になってから感じた悩み・ストレスの具体的な内容を聞いた。(表10)

表10 具体的な内容

20代	
上司が仕事をしない	
社会人の付き合いがめんどくさい	
初対面の人に対する礼儀を持っていない人が多い	
友達と予定を合わせる時間がない	
上司や先輩に媚びるのが疲れる	
後輩が使えない	
他部署の先輩に依頼をする頃が多く、その調整に苦心する。	
今の業務が向いてなく、今後会社で活躍できるのかという漠然とした不安	
30代以降	
学生時代は好きなことを好きな人とできたが、社会人になると選択の余地がない	

各年代のサードプレイスの有無について聞いた。サードプレイスへの理解の風潮が少ないことから、この質問をする際にサードプレイスの説明を付け加えたところ、20代はサードプレイスを持っている人が多く見られる。しかし、30代以降はサードプレイスがない人が半分以上いることがわかった。(表11)

表11 各年代サードプレイスの有無

	20代		30代以降	
複数ある	22名	44%	9名	34%
1つある	22名	44%	3名	11%
ない	5名	12%	14名	55%

各年代にサードプレイスに対してどのようなこ

とを求めているか明らかにした。(表 12) サードプレイスに求めるものとしてはどの年代を見ても、現実世界では1人でリラックスできる空間や会話がある空間が人気で、仮想世界では会話がある空間を重視している人が多い。

表 12 サードプレイスに求めるもの

	20代		30代以降	
現実世界				
リラックスできる	31名	63%	20名	76%
会話を楽しむ	30名	61%	11名	42%
1人になれる空間が欲しい	21名	42%	9名	34%
時間を忘れることができる	15名	30%	9名	34%
遊び心がある	14名	28%	7名	26%
人との新しい出会い	9名	18%	3名	11%
気軽に参加できる	8名	16%	6名	23%
人々が対等な関係であり平等	7名	14%	4名	15%
仮想世界				
会話を楽しむ	10名	20%	4名	15%
時間を忘れることができる	9名	18%	3名	11%
遊び心がある	8名	16%	2名	7%
リラックスできる	8名	16%	3名	11%
人との新しい出会い	6名	12%		
気軽に参加できる	6名	12%	4名	15%
人々が対等な関係で平等	2名	4%	1名	3%
1人になれる空間が欲しい	2名	4%		

## 5. 考察

本研究を通して新社会人(20代)がどのような形のTPを形成しており、具体的に現実世界と仮想世界のTPに求めるものを調査して、彼らの悩み・ストレスの解消方法やそれらの方法のTPとのつながりを明らかにした。また、30代以降の社会人にもアンケートを行ったことで20代とのTPに求めるものの違いが明確になった。日本では現在、交流型TPよりマイプレイス型のTPが好まれる傾向にあると考える。(マイプレイス型とは他人と干渉せずに個人がのんびりと過ごせる場を意味する。)アンケートの結果からは、仮想世界のTPに対する理解が少なく、自分自身の仮想世界のTPに気づいてない人が多く見られた。誰かに相談したり打ち明けたりと人との交流を図って悩み・ストレスを解消したいが、見ず知らずの人と交流は図らず、親しい人に相談するなど交流型TPの風潮は少なくマイプレイス型TPに大きく偏りがあり、特定の人との交流を好む人が多く見られた。他には、コロナ禍で人と会う機会が減ったり、外出の規制により悩み・ストレスを感じている人が多かった。この悩み・ストレスに関し

てはコロナが終息すれば解決される。新社会人(20代)が悩み・ストレスを解消するためにSPのあるべき姿は、特定の心を許せる人という現実空間、或いは1人になれる現実空間に身を置きながら仮想世界で親しい人と連絡を取れる空間がいいのではないかと考える。

## 6. 結論

このような傾向にあることから、現実世界・仮想世界のTPはともに、マイプレイス型が好まれる現代において個人の間を充実させるために適しており、両者のサードプレイスのかけている部分をうまく補い合っている。

## 参考文献

- 1)相良 友哉：地域住民の交流拠点としてのコミュニティスタジオに関する報告 —「第三の場」としての機能と可能性—, 人間生活文化研究, No.30, pp.852-859, 2020年。(参照 2021-5-1)
- 2)高谷 邦彦：サードプレイスとしてのTwitter, 名古屋短期大学研究紀要, No.57, pp.1-13, 2019年。(参照 2021-5-1)
- 3)バーチャル・サードプレイス ～ネットにおける第三の居場所, 2020年4月16日, <https://mamimumeme.com/3-6/virtual-thirdplace>. (参照 2021-6-16)
- 4) 2021年6月更新! 12のソーシャルメディア最新動向データまとめ, Social Media Lab-by Gaiax, 2021年6月3日 <https://gaiax-socialmedialab.jp/post-30833/>. (参照 2021-6-20)
- 5)松本 大知：『サードプレイス』はいかなる場所か? 訳書で徹底議論, リーディングクラブ#4, ソトノバ, 2020年9月23日, <https://sotonoba.place/readingclub4>. (参照 2021-6-20)
- 6)総務省統計局, 人口統計, <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202101.pdf>. (参照 2022-1-20)
- 7)人口の多いMMORPGスマホアプリ20選, 2019年7月11日, <https://mmorpg-app.net/10370>, (参照 2022-1-20)

オフィス街に位置する公園でののんびり過ごす滞在者の動向に関する研究  
～‘Hisaya-odori Park’を対象地として～

EC18003 飯田和也

1. 研究の背景と目的

現代社会では新型コロナウイルスの感染拡大を抑えるため、「3つの密を避ける」ことが市民にとって守るべき大原則として掲げられている。そのため、国民は外出自粛を求められるようになった。しかし、室内に引きこもった状態では精神的疲労の増加が懸念される。そのため感染症対策をしながら精神的疲労を解消できる場として、公園の価値が現在再認識されている。実際、公園での滞在が幸福感を改善させるという調査結果も発表されており、のんびりできる公園は今後もずっと必要不可欠な存在であると予想される。こんな情勢の中でリニューアルされた‘Hisaya-odori Park’はストレスフルなオフィス街に位置しており、社会人にとって1人でのんびりできる空間となる重大な役割も担っている。‘Hisaya-odori Park’はサードプレイスの観点から見ると休日は交流型、平日はマイプレイス型として利用されているのではないかと考えている。そこで平日の公園滞在者の居場所や属性、行動内容を調査し‘Hisaya-odori Park’がオフィス街に位置する公園としてマイプレイス型の居場所であるのか検証する。また、今後の公園デザインにおいてマイプレイスとして精神的疲労を和らぐ空間のポイントを見出すことも本研究の目的とする。

2. 研究の枠組み

2.1 対象地域の概要

本研究では、愛知県名古屋市中区に位置する‘Hisaya-odori Park’のオープン空間を研究対象とする。公園内は南北にコンセプトの異なる4つのZONEに分かれていることが大きな特徴である(図1)。北部のZONE1に行くほど広場を多く有する日常性の高いエリアに、南部のZONE4に行くほどお店の多く集まる商業エリアとしての側面が強くなっている。

調査対象地はオープン空間での利用者の居場所が少ないZONE2を除くZONE1、ZONE3、ZONE4に絞った。さらに事前に行った観察調査から、調査をするにあたって無理のない広さかつ飲食店を除くオープン空間かつ利用者の多く集まる場所に焦点を当てて新たにエリア1、エリア2、エリア3とした。



図1 ‘Hisaya-odori Park’の平面図

(引用:<https://www.aichinow.jp/spots/detail/3245/>)

2.2 研究方法

本研究では、オフィス街に位置する公園でののんびり過ごす滞在者の動向に関する研究を行い、のんびりするために訪れたくなる公園の在り方を明らかにする。そこで2021年8月から12月にかけて表1に示す平日の10日間行動観察調査を行った。行動観察調査は、社会人の出勤前・退勤後の様子も把握できるよう8:00～18:00まで行った。事前の調査で公園利用客が多く見られることが分かっていたため、各エリアの1時間おきの様子を写真として瞬間的に記録した。また、写真からは滞在者の位置や行動内容、属性と性別を観察し記録する。尚、本研究では滞在している利用者のみを対象とするため、歩行者は調査対象外とする。



### 3. ‘Hisaya-odori Park’ の利用実態と調査結果

#### 3.1 日別、時間帯別で見る滞在者数

表1の横軸は時間帯を示しており、その中でもエリアごとに色分けして滞在者数をまとめた。ここから気温が高い8月、9月は気温が低い12月と比べて8時、9時、17時以降の涼しい時間帯に滞在者が多いことが分かる。反対に12月は8月、9月と比べて10時～16時頃の暖かい時間帯に滞在者が多いことが分かる。秋は比較的1日中滞在者が多く見られた。また、蔓延防止等重点措置から緊急事態宣言へと移ったにも関わらず、滞在者の合計人数は大幅に増加した。この理由としては愛知県の新型コロナウイルスの新規感染者数が大幅に減少したからだと考えられる。

表1 全調査日の滞在者の人数

日	愛知県の新型コロナウイルス感染者数(人)	天気	気温(℃)			合計人数(人)			8時(人)		9時(人)		10時(人)		11時(人)		12時(人)		13時(人)		14時(人)		15時(人)		16時(人)		17時(人)		18時(人)												
			平均	最高	最低	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3									
8/26(木)	839	晴れ	33	35	30	62	63	69	3	3	1	2	0	1	3	0	3	3	1	9	7	8	3	6	4	2	5	1	2	3	3	13	8	11	10	17	12	13	5	20	12
9/10(金)	410	晴れ	33	34	29	203	68	120	6	4	1	5	4	5	6	1	0	4	5	4	7	7	2	19	2	3	21	5	3	23	6	14	24	7	29	31	28	27	47	19	32
9/17(金)	133	雨	24	27	22	30	32	55	1	1	5	1	0	2	9	0	7	5	2	3	2	1	0	0	0	0	0	0	3	5	16	17	7	12	17	0	0	0	0		
9/22(水)	102	曇り時々雨	26	29	23	66	69	104	2	3	3	3	0	11	3	0	1	6	1	0	0	0	9	1	8	2	0	0	2	1	19	15	19	33	20	26	28	1	7	12	
10/7(木)	21	曇り時々晴れ	26	28	22	195	100	138	2	8	1	11	1	3	8	2	13	13	6	15	26	15	13	24	13	11	26	10	5	28	13	17	17	12	24	23	4	15	17	16	21
10/21(木)	16	晴れ時々曇り	16	18	10	132	98	134	2	2	2	1	4	1	4	3	0	8	6	11	12	13	15	16	13	12	11	11	23	17	14	9	39	19	20	8	11	27	4	2	14
10/28(木)	11	晴れ	21	24	12	181	125	128	3	2	0	2	4	4	4	3	4	14	16	12	19	19	7	51	16	12	52	23	22	30	12	26	4	10	8	1	5	12	1	16	21
11/11(木)	8	曇り時々晴れ	15	18	10	102	84	115	2	3	2	6	2	5	7	5	7	4	5	11	25	17	17	14	16	17	18	9	17	11	4	13	15	5	6	0	1	8	0	17	12
12/2(木)	4	晴れ	9	12	3	76	50	88	3	0	0	1	0	0	1	0	3	5	2	5	7	8	11	22	1	14	12	11	9	3	7	16	10	11	18	1	10	4	1	0	8
12/9(木)	9	晴れ	13	15	5	61	54	122	0	0	1	0	0	3	4	3	12	3	13	8	17	16	14	12	19	17	2	26	5	7	21	1	10	4	0	0	8	0	0	8	
合計人数(人)					1108	763	1073	24	26	16	32	18	24	57	20	40	69	52	84	133	105	84	175	78	99	164	72	107	122	67	151	138	120	169	118	109	159	76	96	140	
合計人数(人)					2944			66			74			117			205			322			352			343			340			427			386			312			

日ごとの塗り分け ■:緊急事態宣言 ■:蔓延防止等重点

#### 3.2 行動内容から見る公園内の利用実態

図2は全調査日の各エリアで観察された滞在者の行動内容の回数を合算したものである。図を見ると、公園内で多く見られた行動内容には「休憩(外見上の動きがほぼない)」、「会話」、「スマートフォン」が上位に挙がっていることから、対象の公園には特別何かをするわけではなくのんびりすることを目的として訪れる滞在者が多いと予想される。そこで、特に多く見られた「休憩」していた利用者に着目する。まず全行動内容の内、「休憩」が観察された回数の割合をエリアごとに計算した結果、エリア1は25.8%、エリア2は18.3%、エリア3は23.0%であり、どのエリアも「休憩」していた滞在者は20%前後いることが分かった。

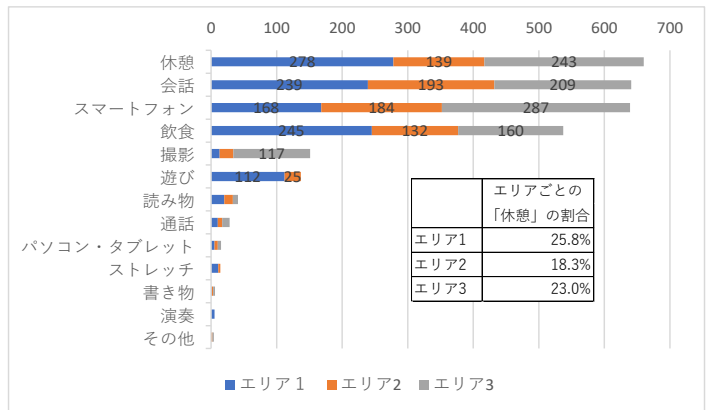


図2 エリアごとに比較した行動内容の回数

#### 3.3 属性、季節、時間帯から見た「休憩」滞在者数のエリア比較

次に「休憩」していた滞在者を属性、季節、時間帯に着目してそれぞれエリアごとに比較した。属性ごとに区分した「休憩」の回数をグラフ化した図3を見るとどのエリアでも社会人の利用が特に多いことが分かる。季節ごとに区分した「休憩」の回数をグラフ化した図4では、比較的1日中晴れていた調査日を夏秋冬

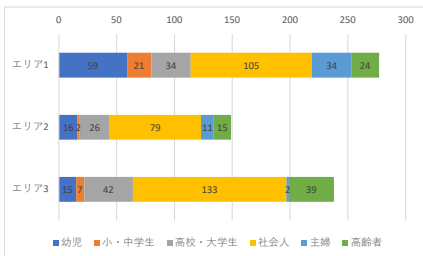


図3 属性ごとに区分した「休憩」の回数

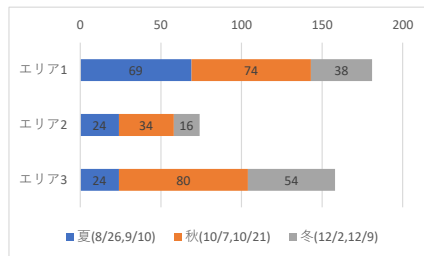


図4 季節ごとに区分した「休憩」の回数

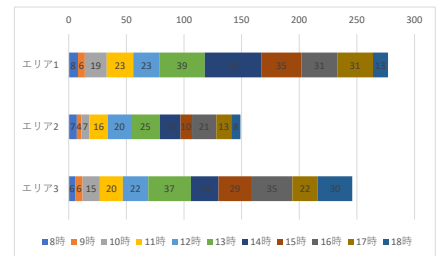


図5 時間帯で区分した「休憩」の回数

の季節ごとに2日間ずつ選りエリア比較した。その結果、どのエリアでも過ごしやすい気温である秋に多くの「休憩」利用者が見られた。しかし、エリア1では夏にも秋とほとんど変わらない程多くの「休憩」利用者が見られた。時間帯で区分した「休憩」の回数をグラフ化した図5を見ると、朝から昼ごろにかけて次第に滞在者数は増加していき、エリア1とエリア2ではそこから夜にかけて減少した。エリア3だけは夜も多くの飲食店が営業しており、辺りが明るく活気があるため滞在者は昼ごろからほとんど変化しなかった。

### 3.4 グループ構成人数と滞在者の居場所の関係

上述から、対象とする公園では「休憩」をしている滞在者が特に多く見られたわけだが、これはグループを構成する人数で意味合いが変わってくると考えられる。なぜなら人数が多いグループほど観察時にたまたまグループの輪から抜けていた可能性があると考えられるからである。そこで、「休憩」をしている各エリアの滞在者をグループの構成人数で比較した場合、特徴が一番顕著に表れたのがエリア1だった。1人で公園に訪れた滞在者のほとんどがベンチや木陰、縁石を居場所としていることが分かる。また、2人組の場合は1人の滞在者よりも芝生を居場所としている人が多いことが見受けられる。さらに3人組以上のグループではベンチや木の下、縁石を居場所とする割合は減り、逆に芝生を居場所とする割合が増えている。予想通りグループの構成人数が多い場合、たまたま観察時に「休憩」をしていた人も本来はグループ全体として別の目的で訪れていたと捉えることができる。この点も踏まえると、のんびりすることを目的として訪れる滞在者は少人数(1人で訪れた滞在者と2人組で訪れた滞在者)であり、ベンチや木陰、縁石に多く見られることが分かった。これらの居場所ののんびりするうえで重要であると考えられる。

エリアごとに比較した場合、図の右端のベンチでは特に滞在者が多く見られた。その理由として、このベンチからは水場に反射したテレビ塔も見ることができるといったことが考えられる。よってこのエリアは街のシンボルを活かした造りになっていることが分かった。

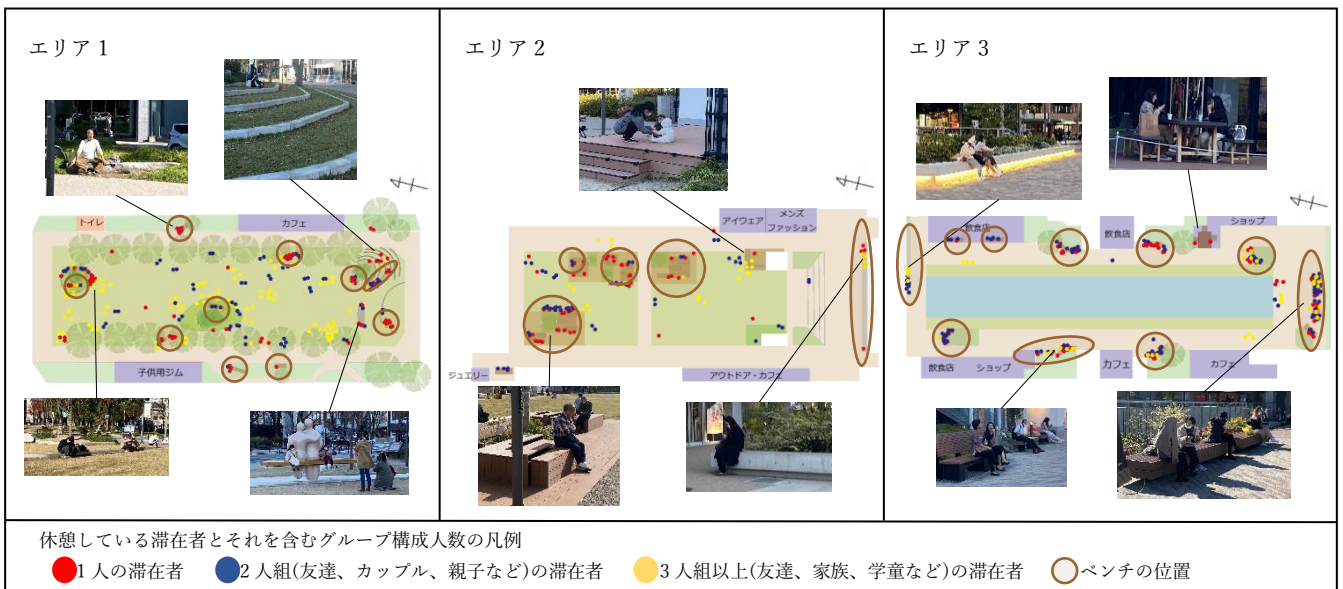


図6 グループ構成人数で比較した「休憩」している滞在者の居場所

### 3.5 時間変化と滞在者の居場所の関係

各エリアの中で滞在者の居場所の種類が最も多く存在するエリア1に着目し、一日の中で時間帯ごとに「休憩」していた滞在者の居場所をグループ構成人数が分かるようにして比較した(図7)。調査日は全調査日の中で最もエリア1の滞在者が多く見られた9/10(金)に決めた。2時間ずつエリア1の様子を見た時、9時・10時は図の上部に数人だけ見られた。12時・13時は人数が少し増え、居場所の位置にばらつきが出た。14時・15時はまた少し人数が増え、居場所が図の下部に集中した。17時・18時はさらに人数が増え、居場所の位置にばらつきが出た。また、対象の公園は東西をビルに囲まれており、図7のような日陰の変化が見られる。以上のことから、滞在者の居場所と日照条件には密接な関係があることが分かった。

### 3.6 属性、性別とグループ構成人数の関係

少人数グループに属している「休憩」滞在者数と全行動内容の全滞在者数をそれぞれ集計し、属性ごとに比較してまとめたものが表3である。この際、幼児・児童に関しては性別の判断が難しいため、男女の人数をまとめて整理した。

対象とする公園では社会人の利用者が圧倒的に多く見られたため、オフィス街に位置する公園として上手く機能していることが分かった。また、高齢者の全体としての滞在者が少ないことも都心に位置する公園であるからだと予想されるが、その中でも1人で訪れている滞在者の割合は高く、リラックスする場として利用されていた。男女の違いに注目すると、どの年齢層も休憩をしている少人数グループの滞在者数に大きな差はなかった。しかし、その中でも男性は1人で訪れる割合が高く、反対に女性は2人組で訪れる割合が高いことが分かった。

## 4 結論

オフィス街に位置する‘Hisaya-odori Park’では仮定通り多くの社会人がマイプレイスとしてのんびり滞在している様子が見られた。また、精神的疲労緩和のためにのんびりできる公園の在り方を考えるという目的に対し、のんびりとしていた滞在者は少人数グループでベンチや縁石、木陰を居場所とすること、さらには日照条件も非常に重要であることが判明した。しかし、これらの利用者にはグループ構成人数や属性、性別によって違いがあることが明らかとなった。これには属性や性別によって精神的疲労の緩和方法が異なることを表していると考えられる。つまり、のんびりできる公園の在り方とは日照条件や滞在しやすい居場所を設けることはもちろん、その公園で滞在する属性や性別に寄り添って設計することが必要である。この論文では明らかにできなかった公園滞在者の本来の来園目的をヒアリング調査によって明確にしたり、はじめは考えていなかった周辺の環境が異なる公園での調査も行う必要が出てきた。今後、新型コロナウイルスが収束したとしても引き続き精神的疲労を緩和するための公園の在り方について追究していきたい。

注釈

1) STUDY HACKER：ストレスだらけのビジネスパーソンに20分間の「公園滞在」をすすめるワケ。

<https://studyhacker.net/columns/kouen-de-stress> (参照 2021-08-10)

参考文献

1) 畠山 雄豪, 丹羽 由佳理, 佐野 友紀, 菊池 雄介, 佐藤 泰：立地環境および利用者傾向が行動分布に与える影響 行動観察調査からみたカフェのサードプレイス利用分析-その1-, 日本建築学会計画系論文集, No. 711, 1067, 2015年5月

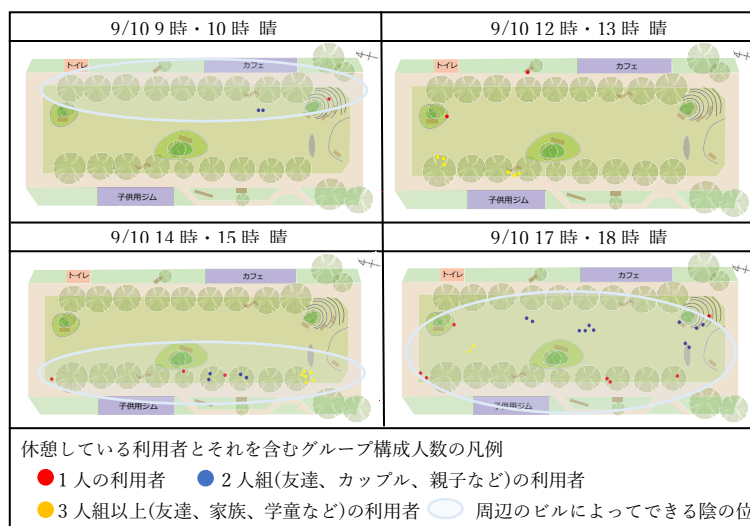


図7 時間変化から見る滞在者の居場

表3 「休憩」している少人数グループと全行動内容の全利用者から見る属性比較

	休憩			全行動内容 ④全利用者数(人)
	①1人(人)	②2人組(人)	③少人数グループ (①+②)(人)	
幼児	0	27	27	170
小・中学生(男)	0	5	5	39
小・中学生(女)	1	13	14	61
高校・大学生(男)	55	44	99	202
高校・大学生(女)	20	116	136	400
社会人(男)	299	58	357	757
社会人(女)	202	131	333	761
主婦	0	27	27	135
高齢者(男)	50	8	58	86
高齢者(女)	22	16	38	95



緑化推進都市・刈谷市における公園と周辺住環境の評価に関する研究

EC18016 柏原 純菜

1. 研究の背景と目的

都市の中における「緑」は、良好な都市景観の向上、地球温暖化の緩和、精神的癒し等、豊かなまちづくりを進めるために欠かせない要素である。そういったまちの「緑」を身近に感じられる公共スペースとして公園が挙げられる。年々緑や自然が減少している中で都市における公園の重要性に注目した。またその公園づくりを進めるうえで、周辺住民からの評価は公園単体の評価同様に考えるべきである。

さらに、2020 年より新型コロナウイルスが感染拡大しており、人々の生活に大きな影響を与えている。変わりゆく生活様式に伴い、今後の公園の在り方や需要についても変化していくと考えられる。現在の公園の利用実態・利用者意識の調査から、求められる公園、公園内や市内における緑の在り方を考察する。また周辺住民に対する意識調査や、公園単体の調査との比較により、緑のつながりとして公園が与える影響について考察する。

2. 研究の枠組み

2-1 研究対象の概要

研究対象地は、愛知県刈谷市にある「ミササガパーク」「フローラルガーデンよさみ」とそれぞれの周辺 400m 圏内とする。(図 1 に示す。) 刈谷市は緑化推進都市を独自で宣言している市であり、魅力あふれる公園づくり事業などの取り組みを行っているため、まちづくりを進めるうえで公園や緑化に力を入れている。



図 1 研究対象地の位置

選出した 2 つの公園は、第 2 次刈谷市緑の基本計画にて設定されている緑化重点地区の一つである「フローラルガーデンよさみ一帯」に含まれている公園であり、刈谷市の緑の拠点としても位置付けられている。フローラルガーデンよさみ一帯は「彩りと安らぎ」というテーマにて緑づくりが進められているため、それらにも着目をして研究を進めていく。



図 2 ミササガパーク園内



図 3 フローラルガーデンよさみ園内

各公園の概要として、ミササガパーク(猿渡公園)は 2001 年に開設された 3.0ha の近隣公園である。刈谷市と姉妹提携都市であるカナダのミササガ市との友好を記念して整備された公園であり、デイキャンプ場、バラ園、外周に植栽されている針葉樹などが公園の特徴として挙げられる。周辺の住環境としては、住宅街の中にある公園であり、河川や整備された緑化道路と隣り合っている。

フローラルガーデンよさみは、2007 年に開設された 4.3ha の公園であり、分類としてはその他の公園として記されている近隣公園規模の公園である。依佐美送信所跡地に作られた公園であり、温室やカフェ、ミニ SL やウォーキングコースのある公園である。住宅と田のちょうど中心に位置する公園である。



写真 1 外から見たミササガパーク



写真 2 外から見たフローラルガーデンよさみ

## 2-2 調査方法

刈谷市の公園緑地課・まちづくり推進課へのヒアリング調査、公園利用者および周辺住民へのアンケート調査を行う。対象公園についての意識・評価を明らかにするとともに公園周辺の住環境について調査する。また新型コロナウイルスの影響についても調査を行う。周辺地域についてはポスティングにて、近隣公園、市内の緑について、住環境についてなどのアンケートを行う。公園内、周辺地域のアンケートはそれぞれ Google フォームで作成し、URL にて行ってもらうこととする。

## 3. 調査

### 3-1 刈谷市公園緑地課へのヒアリング調査

刈谷市都市政策部公園緑地課へ、市内の公園やまちづくりに関するヒアリング調査を行った。目的は、市内の取り組み、市が考える問題などを明らかにし、実際の公園利用者や刈谷市民の意見と重ねて考え

表1 ヒアリング調査概要

調査日	11月26日
調査対象	刈谷市都市政策部公園緑地課 堀場庸介さん
ヒアリング内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・刈谷市独自で宣言している緑化推進都市の宣言について</li> <li>・刈谷市緑の基本計画について</li> <li>・魅力あふれる公園づくり事業について</li> <li>・フローラルガーデンよさみ・ミササガパークについて</li> <li>・その他関連資料提供のお願い</li> </ul>

るためである。ヒアリング詳細は表1に示す。

緑の基本計画については、第3次の計画を施行するために現在取り組んでおり、令和5年の3月に施工される予定である。その中で第2次との変更点として、緑を考える4つの視点「環境」「安全」「活力」「生活」に「活用」という新たな視点が加わる。また、緑の増加ではなく維持することを目標に緑づくりを行っていくとのことであった。

図4に示す提供資から、調査対象公園を含む刈谷市の主要公園の新型コロナウイルス感染拡大前後の人流の変化であり、新型コロナウイルスの流行前後では公園利用の人流の流れは減少傾向にあることが分かった。

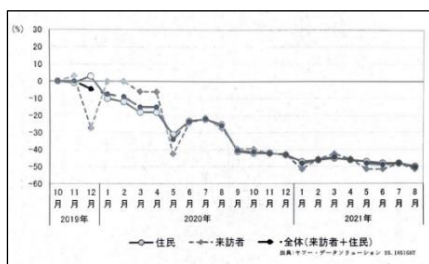


図4 新型コロナウイルス流行前後での刈谷市内の公園来園者の変化 (刈谷市提供資料より)

## 3-2 公園利用者に対する意識調査

各公園利用者に対し、公園の利用状況や意識に関するアンケート調査を行った。新型コロナウイルス感染拡大のため、Google フォームにてアンケートを作成しQRコードを配布した。目的は、公園の利用実態、利用者の意識を明らかにすること、公園同士での比較から求められる公園を考察すること、周辺住民へのアンケートと重ね合わせ、住環境と公園の関係について考えることである。

表2 公園利用者アンケート概要

調査日	11月6日、11月11日、11月14日、11月15日、12月16日、12月30日	
調査時間帯	13:00~17:00	
調査方法	QRコード配布によるアンケート調査	
対象場所	ミササガパーク	フローラルガーデンよさみ
対象者	ミササガパーク利用者	フローラルガーデンよさみ利用者
回答数	20	21

表3 公園利用者アンケート項目

<ul style="list-style-type: none"> <li>・性別 ・年齢 ・職業 ・居住地域 ・交通手段 ・公園までの所要時間</li> <li>・来園時間 ・滞在時間 ・誰と来たか ・利用頻度 ・公園の利用目的</li> <li>・本公園を選んだ理由 ・公園内でお気に入りの場所 ・他に利用頻度の高い公園</li> <li>・本公園の満足度 ・本公園の気に入っている点 ・本公園の不満な点</li> <li>・本公園の自然に対する印象 ・利用していて彩りや安らぎを感じるか</li> <li>・コロナ前後で本公園の利用頻度 ・コロナ禍における公園の利用目的の変化</li> <li>・自宅・職場以外でよく利用する施設 ・今公園に求める要素</li> <li>・都市公園において緑の必要性を感じるか ・生活の中で緑を求めることがあるか</li> <li>・刈谷市に緑は多いと感じるか</li> </ul>
--

公園利用者アンケートの概要・項目は表2、3に示す。以下、アンケート結果をまとめた。

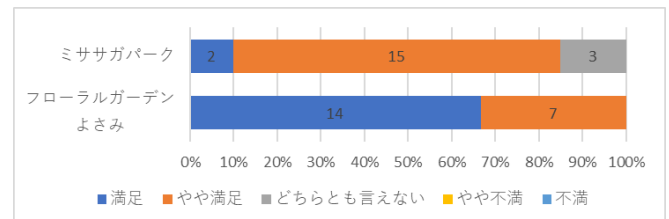


図5 公園の満足度

図5に示す公園の満足度として、ミササガパークは不満、やや不満の回答はないが、やや満足という回答が多かった。フローラルガーデンよさみはどちらとも言えない以下の回答がなく、満足という回答率がかなり高いため2つの公園でかなり差がある。

表4 公園の気に入っている点・不満な点

	気に入っている点	不満な点
ミササガパーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然が多くある</li> <li>・治安がよく穏やかな雰囲気</li> <li>・広々としていて過ごしやすい</li> <li>・人が多すぎなくて静か</li> <li>・景観が良い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴミが前よりも増えた</li> <li>・ベンチがあまり綺麗ではない</li> <li>・カフェがない ・トイレが暗い</li> <li>・全体的に狭い ・夜怖い</li> <li>・最近手入れが行き届いていない</li> <li>・前ほどの絶景が見れなくなった</li> </ul>
フローラルガーデンよさみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子供が多くにぎやかである</li> <li>・綺麗で静か ・ミニSLがある</li> <li>・休憩できる場所が多い</li> <li>・安全にウォーキングできる</li> <li>・マルシェ ・自然豊か</li> <li>・子供の遊具が充実している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ウォーキングコースがない</li> <li>・土日にテイクアウトのお店がほしい</li> <li>・新しい遊具が欲しい ・虫が多い</li> <li>・遊具使用時に密になりやすい</li> <li>・一部手入れされていない</li> </ul>



表4より、ミササガパークでは自然や景観を気に入っている利用者が多く、フローラルガーデンよさみでは子供の利用しやすさが重視されていた。

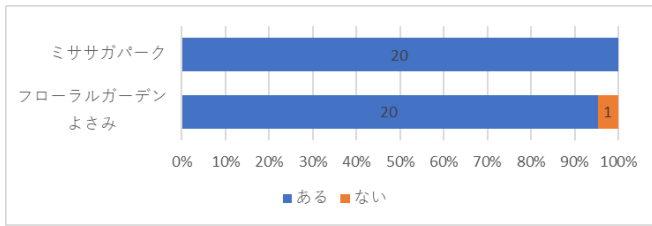


図6 公園を利用して彩りや安らぎを感じることもあるか

図6より両公園を含む緑化重点地区の緑づくりのテーマである彩りと安らぎはどちらの公園でもかなり感じられていた。四季が感じられることや花壇の花、芝生などから彩りを感じていた。

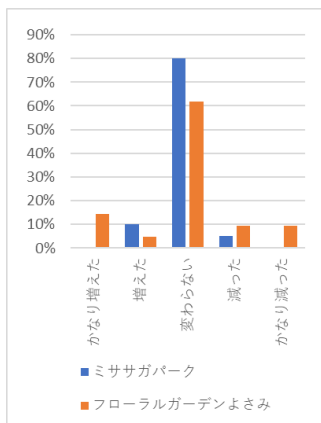


図7 新型コロナウイルス流行前後での公園の利用頻度

図7、8より、新型コロナウイルス流行前後での公園の利用頻度、利用目的はどちらの公園でもあまり変わらなかった。しかし中には時間帯によっては公園の利用を避けるという人や、PCの作業を外の空気を吸いながらやるために訪れる人もおり、少なからず影響はあった。

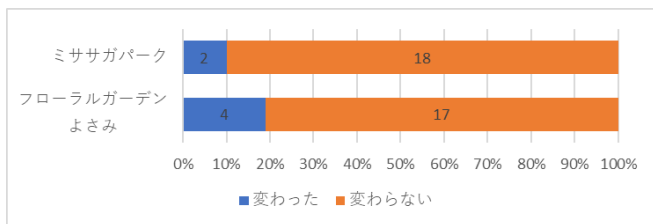


図8 新型コロナウイルス流行後の公園の利用目的の変化

図9より、公園利用者の居住地では、ミササガパークの利用者の8割が刈谷市民だったが、フローラルガーデンよさみの利用者の約半数が刈谷市民ではなく、刈谷市外から訪れていた。

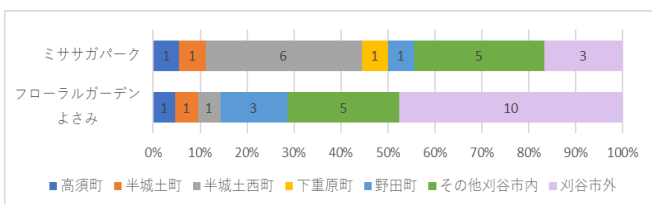


図9 公園利用者の居住地

### 3-3 公園の周辺住民による住環境の評価

各公園 400m圏内で、住環境や公園に関するアンケート調査を行った。新型コロナウイルス感染拡大のため、Google フォームにてアンケートを作成しQRコードをポスティングにて配布した。目的は、公園周辺住民の意識を明らかにすること、周辺公園利用者へのアンケートと重ね合わせ、住環境と公園の関係について考えることである。公園周辺住民へのアンケートの概要・項目は表5、6に示す。

表5 公園周辺住民アンケート概要

配布日	11月13日、11月14日、11月18日	
回答期限	2021年11月26日	
調査方法	QRコード配布によるアンケート調査(ポスティング)	
対象公園	ミササガパーク	フローラルガーデンよさみ
対象場所	ミササガパーク 400m圏内	フローラルガーデンよさみ 400m圏内
配布数	435	419
回答数	57	42
回答率	13.1%	10.0%

表6 公園周辺住民アンケート項目

- ・年齢 ・居住地域 ・住み始めたのはいつ頃か ・居住形態 ・同居者
- ・この地域に住もうと思ったきっかけ ・この地域の満足度 ・満足している点
- ・不満に感じる点 ・居住地域周辺に求める公共施設や機能
- ・緑の拠点である対象公園が与える影響 ・家から対象公園までの距離
- ・対象公園を利用することはあるか ・利用目的 ・対象公園の周辺地域内での役割
- ・生活の中で緑を求めることはあるか ・刈谷市に緑は多いと感じるか

以下、アンケート結果をまとめた。

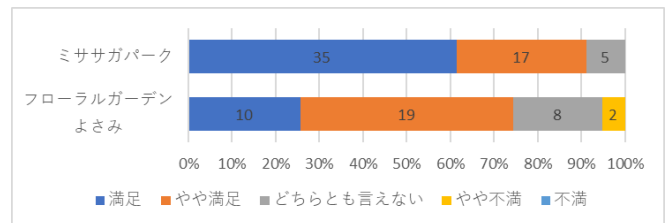


図10 居住地域の満足度

図10の居住地域の満足度は、ミササガパーク周辺では満足と答えた人が60%、やや満足も含めると90%以上であり、かなり満足度が高かった。フローラルガーデンよさみ周辺は約30%が満足とは言えない結果となり、満足という回答をした人も、ミササガパーク周辺に比べて、半分以下であった。

満足している点として、図11より公園の有無がどちらも最も高い割合を占めている。しかし景観の良さ・緑地環境の項目ではミササガパーク周辺とフローラルガーデンよさみ周辺では大きく差が出ている。

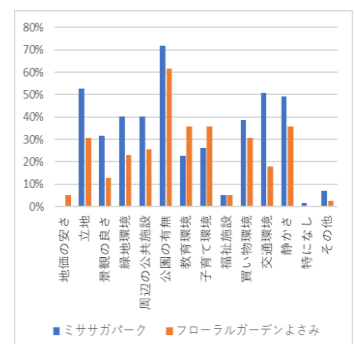


図11 居住地域の満足している点

表 7 居住地域の不満点

ミササガパーク	<ul style="list-style-type: none"> <li>・駅が遠い ・車の通行量の多さ(騒音) ・買い物環境 ・地価が高い</li> <li>・駐車違反がある ・人が冷たい ・バスの本数が少ない</li> <li>・飲食店が少ない ・ごみ捨てのマナー ・豪雨、津波被害が心配</li> <li>・夜暗い ・夜中の騒音 ・公園の花が少ない ・公園の草が多い</li> <li>・虫が多い ・バーベキュー場のマナー</li> </ul>
フローラルガーデンよさみ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通量 ・バスの本数が少ない ・駅が遠い ・地価が高い</li> <li>・個人のお店が無くなっていく ・スーパーがない</li> <li>・道の間狭い ・歩道の狭さ ・公園が騒がしい ・腰高の植栽の手入れ</li> <li>・鳥フン、虫の多さ</li> </ul>

表 7 に示す居住地の不満点では、公園利用者のマナーや虫、雑草や公園内の花の量などの、公園周辺の住環境であるからこそその問題も複数挙げられた。

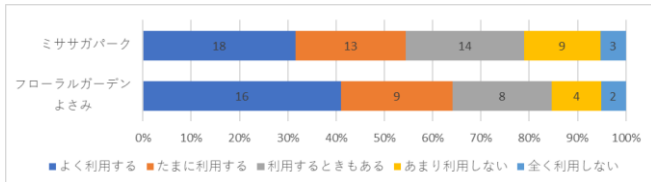


図 12 対象公園を利用するか

図 12 よりどちらも周辺住民の約半数はしばしば対象公園を利用しているが、フローラルガーデンよさみ周辺の方が少しだけ多く公園を利用している。

図 13 より周辺地域から見た対象公園のそれぞれの役割は、ミササガパーク周辺では心の安らぎや緑保全のため、フローラルガーデンよさみ周辺では体を動かす事や子供の遊び場として、周辺住民からそれぞれ異なる役割だと考えられている。

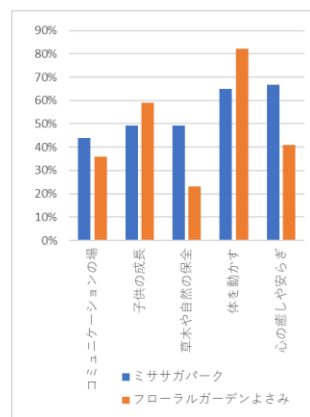


図 13 対象公園の周辺地域内での役割

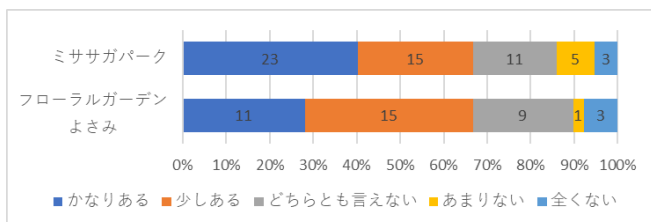


図 14 生活の中で緑を求めることがあるか

生活の中で緑を求めることがあるかについては、図 14 よりどちらの公園周辺でも 6 割以上の周辺住民が少なからず生活の中で緑を求めることがあるが、ミササガパーク周辺に居住している人の方が生活の中で緑を求めることが多い。

#### 4. まとめ

公園利用者の公園の満足度と、周辺住民の住環境

への満足度の評価は真逆となっていた。フローラルガーデンよさみは公園単体での満足度が高く、ミササガパークは公園単体での満足度はフローラルガーデンよさみほど高くないが住環境としての満足度が高いという結果になった。また、住環境の満足している点で、ミササガパークは、公園の有無だけでなく緑地環境、景観で高い評価を得ていたことから、ミササガパーク周辺の方が公園単体だけでなく周辺の河川や緑化道路を含めて、住環境に影響を与えていると考えられる。生活の中で緑を求める割合も、ミササガパーク周辺に居住する人の方が多いと感じていたため、やはり公園や周辺の環境が与える影響だと考えられる。隣接している住宅地からの公園の見え方としても、ミササガパークは公園外周に針葉常緑樹・広葉常緑樹等の植栽がされているため公園周辺からも緑や自然を感じることが出来るが、フローラルガーデンよさみは比較的内部から感じられる自然が多いため、周辺からも緑を感じられるミササガパーク周辺住環境の居心地の良さに繋がっていると考えられる。利用者の属性としても、ミササガパークは周辺住民、フローラルガーデンよさみは市街からの利用者が多く、その点も踏まえるとやはり市外からの利用者が多いフローラルガーデンよさみは公園単体としての利用価値や評価は高いが、居住地の近隣にある公園としてはあまり影響を及ぼす公園ではないと考えられる。公園づくりを今後進めていくうえで、公園単体の魅力だけではなく、周辺住民に与える癒しや安らぎにおいても重きを置いて考えるべきである。

また、新型コロナウイルスの影響では、公園自体の来園者数は減少していたが、現在も利用している人の意識としてはそこまで大きな変化はなかった。しかし、利用をしづらくなったと感じる人もいる反面、気分転換や外の空気を吸うなど、今だからこそ公園を利用したいと考える人もいる。公園や緑の、癒しや安らぎの空間としての需要は高まっているため、いかに利用しやすい公園づくりを行えるかを考えていく必要がある。

#### 参考文献

- 1) 刈谷市公式ウェブサイト <https://www.city.kariya.lg.jp/> (参照 2020-11-26)

歩きたくなるまちの条件に関する研究  
～愛知県日進市のウォーキングマップに着目して～

EC18029 小久保 聡真

## 1.研究の背景と目的

### 1.1 研究の背景と目的

日本では、平均寿命と健康寿命は年々上昇しているものの、この差が縮まっていないことが危険視されている。今後この差が拡大していけば、医療や介護のための費用が増加していき、経済的、身体的に負担が大きくなっていく。この問題を個人が意識していき、できるだけ早い段階で健康づくりに取り組むことが必要である。この健康寿命の延伸の方法として、本研究では「ウォーキング」に着目した。日頃から歩くことを意識することで、心身の健康促進に繋がると考える。近年では「ウォーカブル」といった、「居心地がよく歩きたくなるまちなかづくり」をコンセプトに、現代の車社会から歩行者中心の社会へ変えていくことを目指した政策が注目されている。この政策によってまちに賑わいが生まれ、国民の健康に繋がるといった効果が期待できる。このような、歩くことへの関心が高まっている中で、歩行者がどのような環境で歩きたくなるのかを明らかにすることが本研究の目的である。

## 2.研究の枠組み

### 2.1 日進市について

日進市は健康に関する取り組みをいくつか行っている。その一つとして、「いきいき健康プランにしん21」という市民の健康づくりを進めるための基本計画がある。この計画の主旨である健康寿命の延伸につなげる施策として取り上げられたのが、ウォーキングであり、これを普及するために「ヘルピーウォーキングマップ」を作成した。コースが8つ設定されており、調査場所をある程度絞るためにも、このマップを研究対象として、本研究を進めることとした。



写真1：ヘルピーウォーキングマップ

### 2.2 研究方法

研究は三つの調査を行う。まず、ヘルピーウォーキングマップに関するヒアリング調査である。日進市保健センターで担当の方にこのマップに関するヒアリングを行い、作成の背景や目的を明らかにし、そこから市の考える歩きやすさを見つけられると考える。続いて、調査対象地での目視調査である。これは、次に行うアンケート調査のために、ウォーキングを行う人がどれだけいるのかを事前に把握するためであるが、歩きやすさに関する環境等を目視でわかる範囲で明らかにすることも目的とする。最後に、アンケート調査である。調査対象地でウォーキングを行う方を対象にし、実際にウォーキングを行う人が考えるまちの歩きやすさ、歩きたくなるまちの条件を明らかにすることを目的とする。

### 2.3 調査対象

事前にこのマップの全8コースを歩き、人が多い場所3カ所を調査場所に決定した。また、目視調査では対象者の基準を三つに分けて行っていく。

1つ目は、ウォーキング目的だと目視でわかるような格好の人とする。ジャージやウインドブレーカー、ランニングシューズなど運動を目的としている服装をした人を想定する。(写真2の①参照)

2つ目は、ウォーキング目的かどうか目視では判断しづらい人とする。動きやすそうではあるが、スポーツブランドではなさそうな服や靴を身につけている人を想定する。(写真2の②参照)



3つ目は、ウォーキング目的ではないと目視で判断できる人とする。スーツを着用した人、動きにくそうな服装、足下は革靴、サンダルなど運動に適さないものを着用している人を想定する。(写真2の③参照)



写真2：観察者の服装のイメージ

この3つの分類以外にもランニング、犬の散歩を別で記録する。

### 3.ウォーキングマップの作成背景と利用状況

#### 3.1 ヒアリング調査の概要

ヘルピーウォーキングマップの作成背景、経緯、利用状況を把握するために、ヒアリング調査を行った。これらを明かし、そこから市の考える歩きやすさを知ることができると考えた。

表1：ヒアリング調査概要

日程	2021年10月20日(木)、11月4日(木)
場所	日進市保健センター
方法	担当の方に直接質問

表2：日進市健康保険センターでのヒアリング項目

・ウォーキングマップ作成の成果	・利用している年齢層
・作成時に参考にしたもの	・工夫点
・マップ完成前後での歩行者数の変化	・コロナ禍前後の利用者の変化
・コース作成時に整備した道	・安全面の配慮
・マップ完成後に改良した部分	・コース作成時で大変だったこと
・コースに川沿いが多い理由	・マップを活用した行事等の有無
・比較的利用の多いコース、少ないコース	・今後のマップの改良、コース変更の予定
・短、中、長距離での利用率	

#### 3.2 作成の目的と背景

日進市では、市民の健康づくりを進めるための基本計画「いきいき健康プランにっしん21」を策定し、この計画の主旨である健康寿命の延伸の方法として取り上げられているウォーキングを普及するために身近な地域である市内の小中学校区別にウォーキングコースを設定した。経緯については次の表の通りである。利用状況に関しては、作成後の調査はしていないとのことで、把握することはできなかった。よって、この調査でわからなかったことを明らかにすることも本研究の意義と捉え、研究を進めた。

表3：ウォーキングマップ作成の経緯

時期	内容
平成5年度	県事業「健康の道等整備事業補助金」を活用し「にっしん健康の道」を整備
平成22年度	「にっしん健康の道」を「香久山小学校区コース（にっしん健康の道）」に位置づけ
平成23年9月	「梨の木小学校区コース」、「相野山小学校区コース」作成
平成24年3月	「南小学校区コース」、「北小学校区コース」作成
平成24年度	「東小学校区コース」、「西・赤池小学校区コース」作成
平成25年度	全域版マップ作成（7コース掲載したもの）
平成28年度	「竹の山小学校区コース」作成

## 4.目視調査

### 4.1 目視調査の概要

調査は、北小学校区コースの川沿いの道、香久山小学校区コースの香久山1号緑地、梨の木小学校区コースの愛知池の一部分で行った。時間帯はウォーキングを行う人が多いと予測される朝と夕方を選んだ。それぞれの場所で朝6時～8時と夕方3時半から5時半に分けて調査を行った。

各調査場所の説明は以下の通りである。

表4：目視調査概要

日程	2021年11月1日(月)、2日(火)、4日(木)
対象	①川沿いの道②香久山1号緑地③愛知池
方法	調査対象地3カ所でウォーキングを行う人の数を観察

#### ①川沿いの道 (写真3参照)

住宅地から少し離れており、道沿いには川の他に畑や草木がある。街灯は無く、夜間は歩けない。



写真3：川沿いの道にウォーキングコース  
(2021年12月16日 Googlemapより引用したものを筆者加工)

#### ②香久山1号緑地 (写真4参照)

住宅地のすぐ側にあり、道沿いには小さな川と草木がある。隣には公園もあり、公園には街灯がある。車は通行できない。

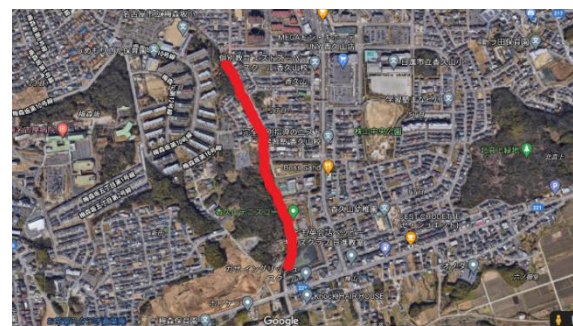


写真4：香久山1号緑地のウォーキングコース  
(2021年12月16日 Googlemapより引用したものを筆者加工)

③愛知池 (写真5参照)

池の周辺にある道で、住宅地からは少し離れている。駐車場が2カ所あり、近くには駅もある。隣には会社がある。一周7.4kmで、道沿いには草木がある。堤防沿いのみ街灯がある。車は通れない。

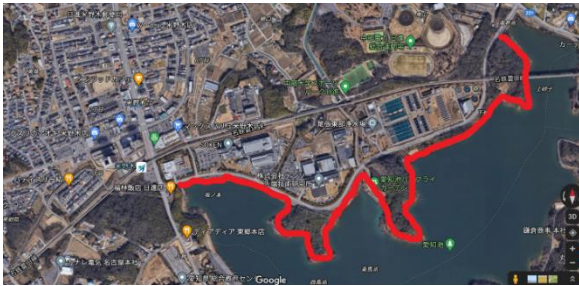


写真5: 愛知池のウォーキングコース

(2021年12月16日 Googlemap より引用したものを筆者加工)

4.2 各調査場所の利用状況

目視調査の結果は表5の通りである。

表5: 11月12月の歩行者数

	川沿いの道 (朝)		川沿いの道 (夕)		香久山1号緑地 (朝)		香久山1号緑地 (夕)		愛知池 (朝)		愛知池 (夕)	
	11月	12月	11月	12月	11月	12月	11月	12月	11月	12月	11月	12月
総人数	24	21	12	9	20	18	19	15	28	26	22	37
①	19	14	6	4	17	14	13	12	18	16	13	18
②	2	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1
③	4	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1
ランニング	0	0	2	2	0	1	0	0	10	10	9	15
犬の散歩	4	5	4	3	2	3	4	2	0	0	0	2

夕方よりも朝の方がウォーキングをしている人が多かった。街灯が無く、日没後は歩くことが困難であり、明るい時間帯を選んで歩いているといった理由が考えられる。この調査で、歩行者の最も多いのが愛知池であることがわかった。これは、コースが曲がりくねっており景色の変化を楽しめることが理由であると考えられる。(写真6参照)

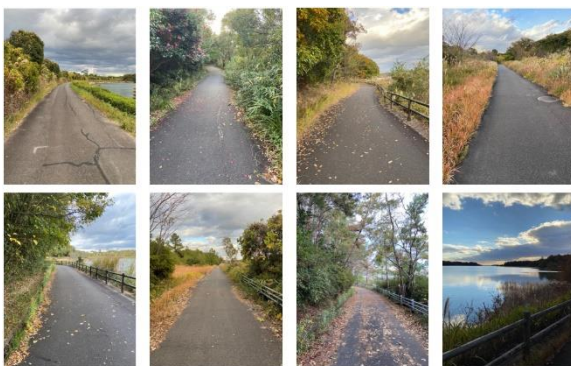


写真6: ウォーキングコースの景色 (愛知池)

4.3 11月と12月の比較

11月と12月では、歩く人の数はあまり変化しなかった。川沿いの道では、11月、12月ともに夕方での歩行者数が少ないという結果になった。他の2カ所ではこのような変化がなかった。

5. アンケート調査

5.1 アンケート調査の概要

アンケート調査は、調査対象地3カ所で実際にウォーキングを行っている人に協力をお願いした。

表6: アンケート調査概要

日程	2021年11月8日、11日、15日、16日、18日、23日
対象	①川沿いの道②香久山1号緑地③愛知池
方法	調査対象地3カ所でウォーキングを行う人へアンケート調査
回答人数	52人

5.2 歩きたい、歩きやすいと思えるまち

3カ所とも「たくさんの緑」と答える人が最も多く、割合も高かった。ウォーキングのために整備された道、車通りが少ない、といった回答もどの場所でも回答数が比較的近かった。また、川沿いの道で

表7: アンケート調査項目

・性別	・普段(本日以外)のウォーキングの目的
・年齢	・1回のウォーキング時間
・ウォーキングをよく行うか	・コロナによる頻度、目的の変化
・この場所で歩く頻度	・日進市にはどのくらい住んでいるか
・この場所を選んだ理由	・普段生活していて歩きやすいと感じるか
・本日のウォーキングの目的	・歩きたい、歩きやすいと思えるまちには何が必要か
・ウォーキングの頻度	

「池や川などの水辺空間」の回答が一人に対して、他2カ所では複数いた。川沿いの道はガードレールで遮られているのに対して、香久山1号緑地では、鎖で遮られており、川がよく見え、良い印象であると考えられる。(写真7参照)

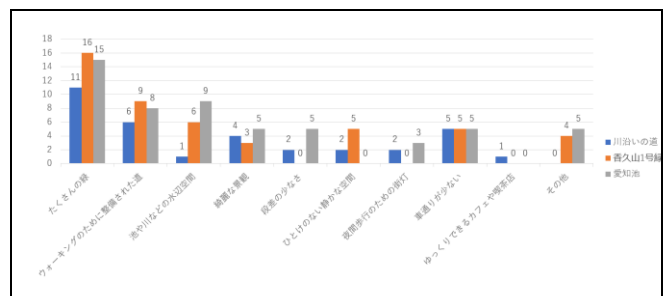


図1: 歩きたい、歩きやすいと思えるまちには何が必要か

表8: 図1の結果の割合表記

	川沿いの道	香久山1号緑地	愛知池
たくさんの緑	79%	94%	71%
ウォーキングのために整備された道	43%	53%	38%
池や川などの水辺空間	7%	35%	43%
綺麗な景観	29%	18%	24%
段差の少なさ	14%	0%	24%
ひとけのない静かな空間	14%	29%	0%
夜間歩行のための街灯	14%	0%	14%
車通りが少ない	36%	29%	24%
ゆっくりできるカフェや喫茶店	7%	0%	0%
その他	0%	24%	24%





写真7：川沿いの柵の違い

### 5.3 ウォーキングの頻度

頻度を場所ごとで見ると、川沿いの道は毎日歩く人が大半であるのに対して、他2カ所では週に2, 3回の回答が多かった。香久山1号緑地と愛知池は日進市以外のまちからも近い場所に位置しており、他の市民の利用もあることから、利用者の住居からの距離に関係していると考えられる。

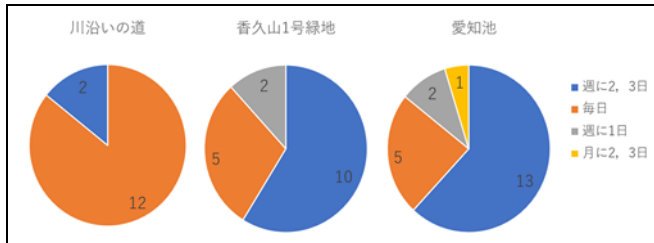


図2：ウォーキングの頻度

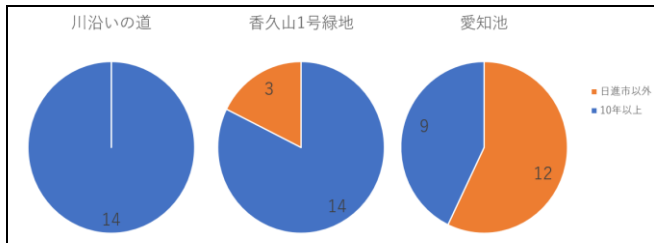


図3：日進市に住んでいる期間

### 5.4 一回のウォーキング時間について

ウォーキングの時間は、川沿いの道は短時間の人が多く、他2カ所では、比較的長い時間ウォーキングを行う人が多かった。また、愛知池の回答者のほとんどが1時間以上を解答されていた。

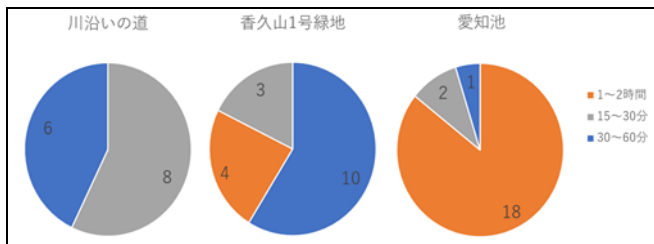


図4：1回のウォーキング時間

### 5.5 コロナによる影響

コロナによるウォーキングの頻度の変化を調査したところ、ほとんどが「変化なし」と答えていた。

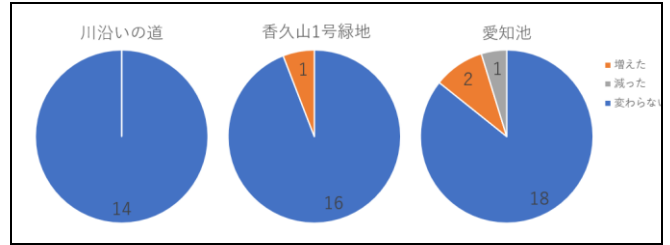


図5：コロナ禍前後でのウォーキングの頻度の変化

## 6 まとめ

### 6.1 調査結果からの考察

今回の調査で、緑の多さが重要視されるということがわかった。緑の量や種類によって、歩く人からの印象が変わり、歩く人の数に影響してくると思われる。周辺環境によって利用頻度や時間が変化することから、住宅地からの距離、公共交通機関の有無などアクセス面にも配慮した環境の整備をすることも、歩く人の増加へ繋がると考えられる。目視調査では、街灯の設置が歩く人の増加を見込めると考えていたが、アンケート調査で街灯を求める人が少なく、夜間よりも景観などを楽しめる朝方に歩いている傾向があると考えられる。歩いている人の数は愛知池が一番多く、歩いている時間も長いことから、景色の変化を楽しむことを目的としていることも考えられる。また、川が見えやすい柵のほうが良い印象であり、歩く空間と水辺空間との境界の作り方も重要であると考えられる。

### 6.2 結論

緑の多い場所に道を整備するか、今ある道に緑を増やことで歩く人の増加が見込める。曲がりくねったコースを整備し、景色に変化をつくることも効果的である。川や池には、歩く人にそれらが見えやすい柵をつくとよい。交通面の整備を行い、アクセスしやすくすることも歩きたいという動機に繋がってくる。

### 参考文献

- 健康と“観光”を同時に強化、ウォーキングで実現するまちづくり  
<https://jichitai.works/article/details/424>(2021年12月15日参照)
- いきいき健康プランにしん 21-日進市-  
<https://www.city.nisshin.lg.jp/department/kenko/kenko/3/2/3449.html>(2021年12月15日参照)

## コロナ禍における大学キャンパス内の学習場所に関する研究

－ 中部大学を対象として －

EC18057 野田梨花子

### 1. 研究背景と目的

新型コロナウイルス感染拡大により、多くの大学で遠隔授業が導入された。現在は対面授業と組み合わせて対応され、新型コロナウイルスの感染収束後も遠隔授業で得たものを引き継ぎ、対面授業と遠隔授業を組み合わせた新しい大学教育の在り方が求められると考えられる。一方大学において遠隔授業と対面授業の混在が一般化した例は新型コロナウイルスの感染拡大以前ではほとんど見られず、現在でも大学の学習環境がどうあるべきであるかについてはまだ十分に検討されていないのが現状である。また本研究では郊外型キャンパスを対象とする事に研究の意義がある。郊外型のキャンパスは自然豊かな広大なキャンパスであり開放的な雰囲気にあふれる静かな環境で勉強やクラブ活動に熱中できる反面、通学に時間がかかると共に周辺にカフェやショッピングモールなどが無いことが多く、遅い時間まで勉強したり学生同士が交流する場が少ないとされる。その中でも特に学生街の無い郊外型キャンパスでは家と大学の行き来だけになりがちである。よって大学キャンパス内に充実した学習環境が必要である。また以上のことから中部大学を調査対象地とする。中部大学は周辺に学生街がない郊外型キャンパスである。よって本研究ではコロナ禍において学生の大学キャンパス内での学習場所の現状を明らかにする。そして新型コロナウイルス感染拡大が未だに終息せず、今後も遠隔授業の活用が考えられる中で、大学の学習環境の在り方を考察することを目的とする。

### 2. 研究の枠組み

#### 2.1 調査対象地概要

本研究の調査対象地である中部大学春日井キャンパスは周辺に学生街の無い郊外型キャンパスである。また大学キャンパス内の主な学習場所としては、附属三浦記念図書館、別棟で不言実行館コモンズセンター

が設置されている。また遠隔授業用講義室として9、10、21、25、31、51、71号館の講義室を開放している。大学キャンパスのほぼ中心に位置するキャンパスプラザ1階には学生ラウンジがあり、2階には机と椅子が設置されている。その他にも、食堂が3カ所と、大学キャンパスの中心から離れた50号館や70号館にはそれぞれ学生ラウンジが設置されている。

#### 2.2 研究方法

本研究では、大学キャンパス内の学習場所の利用実態や学習場所の選択条件を明らかにするためのアンケート調査を行う。アンケート結果の分析から大学キャンパス内の学習場所の問題点を捉えた。また大学キャンパス内の「ラーニングコモンズ」に着目し、運営を行うコモンズサポーターに利用実態の調査としてヒアリング調査を行った。これらの調査結果からコロナ禍における大学の学習環境の在り方を考察する。

### 3. アンケート調査

#### 3.1 アンケート概要

工学部都市建設工学科の1年生(71名)2年生(75名)3年生(45名)を対象にアンケート調査を行った。なお4年生は授業数が少ないと考えられるため調査対象から除外した。調査の概要は(表1)に記す。アンケートの目的は大学キャンパス内の学習場所の利用実態や学習場所の選択条件を明らかにすることで大学キャンパス内の学習場所の問題点を捉えると共にコロナ禍における大学の学習環境の在り方を考察することである。

表1 アンケート概要

対象	1年生	2年生	3年生
日時	2021年11月12日(金)	2021年11月19日(金)	2021年12月10日~17日(金)
方法	アンケート用紙配布、記入後回収		Googleフォームを用いたwebアンケート

表2 アンケート項目

<ul style="list-style-type: none"> <li>・性別・居住形態・通学時間・普段の学習場所・学習がはかどると感じる場所</li> <li>・オンデマンド型授業の受講時間・普段何人で学習するか・学習場所に求める事</li> <li>・大学キャンパス内での学習場所・大学キャンパス内での学習場所に求める事</li> <li>・遠隔授業用講義室の利用実態・空きコマどこで過ごすか・空きコマでの行動</li> <li>・空きコマ何人で過ごすか・大学での滞在場所と移動動線</li> </ul>
---

### 3.3 アンケート結果

#### 3.3.1 学習場所の現状について

各学年のほとんどの学生がレポート課題や授業の予習復習を自宅で行っていることが分かった。次に大学という回答が多い。また zoom 等の同時双方型遠隔授業やオンデマンド型の遠隔授業も自宅で行う学生が最も多い。現状として学生は対面授業以外の学習を自宅で行っていることが分かる。

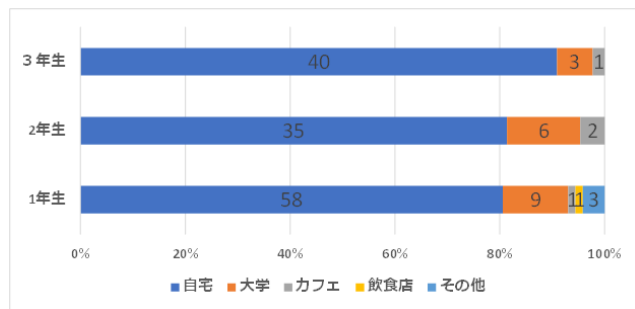


図1 レポート課題、授業の予習・復習

#### 3.3.2 大学キャンパス内での学習場所の利用実態

レポート課題、遠隔授業ともに大学キャンパス内で行う際は講義室で行うことが多いという回答が最も多い。ここでいう講義室というのは授業で利用されていない空き教室のことである。次に図書館という回答が多い。また遠隔授業では(表5)、(表6)で示すように遠隔授業用講義室という回答も見受けられるが、スチューデントcommonsとラーニングcommonsは共にほとんど学習の際に利用されていないことが分かるよって、commonsセンターや遠隔授業用講義室など、大学が提供する学習場所はあまり使用されていないことが分かる。

表4 レポート課題、授業の予習・復習

選択肢	1年生		2年生		3年生	
	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合
①図書館	24	34%	20	27%	8	19%
②食堂	6	9%	10	13%	2	5%
③キャンパスプラザF1	6	9%	8	11%	2	5%
④キャンパスプラザF2	1	1%	1	1%	1	2%
⑤講義室	30	42%	30	40%	22	51%
⑥スチューデントcommons	1	1%	2	3%	2	5%
⑦ラーニングcommons	0	0%	1	1%	2	5%
⑧遠隔授業用講義室	1	1%	1	1%	1	2%
⑨その他	2	3%	2	3%	3	6%

表5 zoom 等の同時双方型遠隔授業

選択肢	1年生		2年生		3年生	
	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合
①図書館	10	14%	10	13%	5	12%
②食堂	6	9%	8	11%	1	2%
③キャンパスプラザF1	6	9%	5	7%	3	7%
④キャンパスプラザF2	1	1%	3	4%	1	2%
⑤講義室	36	51%	37	49%	26	61%
⑥スチューデントcommons	3	4%	2	3%	1	2%
⑦ラーニングcommons	0	0%	1	1%	1	2%
⑧遠隔授業用講義室	6	8%	6	8%	1	2%
⑨その他	3	4%	3	4%	4	10%

表6 オンデマンド型の遠隔授業

選択肢	1年生		2年生		3年生	
	人数(人)	割合	人数(人)	割合	人数(人)	割合
①図書館	15	21%	25	19%	5	12%
②食堂	8	12%	25	19%	1	2%
③キャンパスプラザF1	6	9%	7	5%	3	7%
④キャンパスプラザF2	0	0%	9	7%	1	2%
⑤講義室	31	44%	40	30%	26	61%
⑥スチューデントcommons	1	1%	3	2%	1	2%
⑦ラーニングcommons	0	0%	3	2%	1	2%
⑧遠隔授業用講義室	4	6%	12	9%	1	2%
⑨その他	5	7%	9	7%	4	10%

#### 3.3.4 大学キャンパス内での学習場所の選択条件

学習場所を選択する際に何を考慮するのかについて、何も条件を設けない時を(図2)、大学キャンパス内で選択するという条件を設けた時を(図3)に示す。何も条件を設けない時には静かであることが学習場所を選択する際に最も重要であることが分かる。大学キャンパス内で学習場所を選択する際には友達と話せることが重要であることが分かる。2つの結果を比較すると、静かである、長時間利用できる、設備が整っているはどちらでも比較的回答数が多いのに対し(図2)より(図3)では飲食ができるが飛躍的に増加していることが分かる。よって大学内キャンパス内で学習場所を選択する際は普段の学習場所とは別に、友達と相談し合いながらや飲食しながらなど、学習の合間にリフレッシュできることが重要であると考えられる。

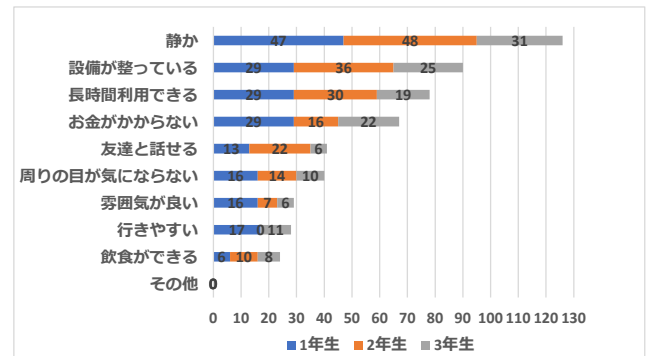


図2 学習場所の選択条件

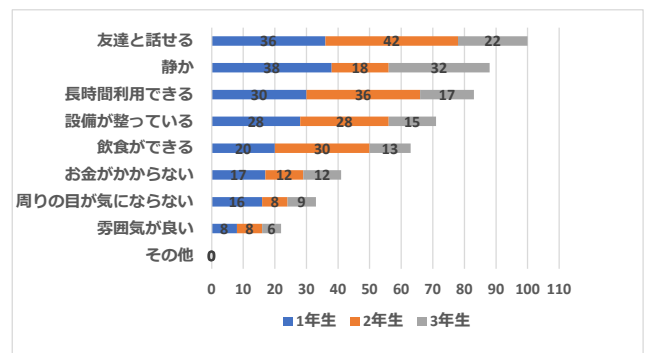


図3 大学キャンパス内の学習場所の選択条件

#### 3.3.5 大学キャンパス内での学生の行動

学生のある1日の大学キャンパス内に到着してから帰宅するまでに訪れた場所を記述すると共に、通っ

た道を大学キャンパス内のマップに記した結果を(図4)に示す。(図4)について、マップ上に学生が滞在した場所を青い丸印で表した。丸印は滞在した人数が5人以上の場所に限り丸印が大きいほど滞在した人数が多いということである。また赤い線は学生が通った道を表す。なお線が太いほど通った学生が多いことを表す。(図4)から主に工学部の授業が行われる9号館、都市建設工学科の授業が行われる5号館と18号館に滞在していることが多いことが分かる。また大学に到着してから、上記の建物をつなぐ道を学生が良く通っていることが分かる。さらに記述の回答から得られた結果のほぼすべてが、大学に到着してから講義室で履修した講義を受け、その日の全ての講義を受けたのちそのまま帰宅するというものであった。各学年空きコマがない学生が多く、大学キャンパス内の移動も授業と授業の教室を行き来する移動のみで、授業後に大学キャンパスに残って学習したり友達と交流する学生はほとんどいないことが分かった。



図4 大学キャンパス内での行動

### 3.3.6 遠隔授業用講義室の利用実態

(図5)が示すように、各学年で、コモンスセンターと同様に遠隔授業用講義室もあまり使用されていないことが分かる。

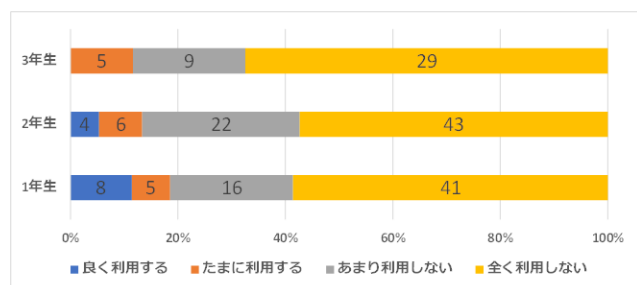


図5 遠隔授業用講義室利用実態

## 4. ラーニングコモンスの実態調査

### 4.2 ラーニングコモンスの利用実態

学習場所としての利用が少ないというアンケート結果を受け、コモンスセンターの中でもさらに学習場所として位置図けられているラーニングコモンスに着目し、実態を調査することで使用されない要因を探ることを目的とし、コモンスセンターを運営し利用者をサポートするコモンスサポーターにヒアリング調査を行う。調査の概要は(表7)に記す。

日時	2021年12月22日(火)
質問者	コモンスサポーター
質問内容	・利用者数・利用者の学部学科・使用ルール・利用状況・コロナ前後での変化・遠隔授業について

表7 ヒアリング調査概要

#### 4.1 ラーニングコモンス概要

不言実行館の3階に位置し、レポート作成などの自習ほかグループワークやディスカッション、zoom等の同時双方型の遠隔授業などに利用できる。グループ席を中心に椅子や可動式机などが設置されている。クワイエットルームと呼ばれる会話禁止で、個人利用者向けのエリアもある。利用のルールとしては、①飲食禁止、②机やいすなどの使用後は整理整頓を行う、③携帯電話はマナーモードにする、④大声は禁止である。⑤学習活動に関わらないゲームや各種勧誘活動は禁止である。

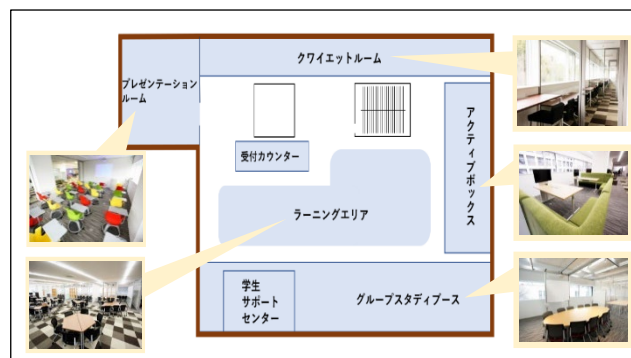


図6 ラーニングコモンス概要図(参考:中部大学ホームページ)

#### 4.2.1 利用者の実態について

2021年12月13日から17日までの5日間の利用者数と利用者の学部学科のデータを得た。そのデータから各学部の在籍者数のうちのラーニング・コモンスの利用者の割合を(表8)に示す。(表8)より、ラーニングコモンスの利用者の割合はそれぞれの学部の在籍者の20%にも満たない事がわかる。またコモンスサポーターによると同じ学生の利用が多く、学生に広く利用されているとは言えないことというを考慮すると、実際にはより低い割合になると考えられる。



表8 各学部在籍者数における利用者の割合

学部	在籍者数(人)	利用者数(人)	割合
工学部	3647	690	18%
経営情報学部	1251	153	5%
国際関係学部	562	135	2%
人文学部	1650	67	4%
応用生物学部	1410	62	10%
生命健康科学部	1454	10	11%
現代教育学部	648	5	1%

#### 4.2.2 使用ルールについて

概要で述べたホームページに記載のある4つの大まかな使用ルールに加え、ペットボトルなどのフタつきの飲料のみ持ち込み可能であるほかカードゲームや居眠りは禁止である。大声は禁止であるが、交流の場であるため学習などの際の相談は積極的に行ってほしいとのことである。利用時間に制限などはない。ラーニングコモンズがあまり使用されない要因の一つとして厳しい使用ルールが挙げられると考える。

#### 4.2.3 コロナ前後での変化について

コロナウイルスの感染拡大防止のため、机に対して椅子の数を減らしたり、入口に検温や学生の入退場を記録する場を設けるなど対策を行っている。またコロナウイルス感染拡大の前よりも後の方が利用者が増加したことが分かった。遠隔授業の導入によりレポート課題やzoomでの授業が増加したからであると考えられる。各学生の利用時間の傾向から授業の間の1コマなど空きコマに利用する学生が多いと考える。

### 5. まとめ

#### 5.1 郊外型キャンパス内に必要な学習場所

昨年は新型コロナウイルス影響により授業は遠隔授業となりキャンパスに来ることも出来なくなった。新しい友達を作ることも出来ないまま、自宅で過ごさざるを得なくなったことは学生にとって心細く不安であったと考えられる。特に下宿をしている学生や一人暮らしを始めたばかりの1年生は、誰もいない部屋で一人パソコンに向かう毎日が始まり、孤独感や孤立感を感じたことであろう。一方、家族と同居していてもプライバシーが確保できない自室がないため落ち着いて遠隔授業を受けられない学生もいたと考えられる。一度は通常の対面授業を再開する動きのあった各大学で再び遠隔授業へ方向転換されたが、第5波が終息するにつれ、対面授業が再び再開された。今後も変わりゆく状況に授業形態も対応していかなければならないため完全に対面授業のみにするのではなく遠隔授業を活用

することが望まれていると考えられる。今後も遠隔授業の導入が推進されると考えられる中、学生に学習成果をもたらすと共に、孤独感や孤立感を和らげる環境が大学キャンパス内に必要であると考えられる。特に、調査対象地である中部大学のような郊外型のキャンパスに通う学生は家と大学の行き来だけになりがちであるのと共に、対面授業と遠隔授業が混同した現在は、大学に来る機会も減り、対面授業のために大学へ来た際も、授業を受けてすぐに帰宅するという学生が多いとされるため、より孤独感や孤立感を感じやすいと考えられる。そのため、このような学習場所が必要であると考えられる。

#### 5.2 自主学習を促すカフェスペースの導入

学習や学生らの交流を促すために設けられた共有スペースであるラーニングコモンズはあまり利用されていないのが現状である。アンケート調査より学生が学習する場所において、飲食ができることが重要であるとされるため、ラーニングコモンズにカフェスペースの導入を提案する。カフェスペースを設備することで、気軽にラーニングコモンズに立ち寄る学生が増加し、能動的な学習を促進させる可能性がある。さらに、使用ルールを緩めることで、学生が学習の合間にリフレッシュの時間を設けられ、長時間滞在を促し、学習の持続が期待できると考える。

#### 5.2 屋外に学習場所を設置

使用されていないとされる屋外のベンチやなどを学習場所にすることを提案する。机やイスなどを学習のしやすいものすると共にコンセントやWi-Fi環境の設備を充実させることにより学習しやすい環境にする。屋外に学習場所を設置することで孤独感・孤立感の解消、リフレッシュ効果に加え新型コロナウイルス感染拡大防止や大学キャンパス内ににぎわいを生み出す効果が期待できる。広大なキャンパスを十分に活用し、多種多様な学習場所を大学キャンパス内のあらゆる場所に設置し、学生が自由に選択できる環境にすることが学生の大学キャンパスの利用を促すと考える。

#### 参考文献

- 1) 中部大学ホームページ：https://www.chubu.ac.jp（参照2022-1-5）
- 2) 山田崇史，森口元貴：大学生のストレス解消に利用されるサードプレイスに関する研究：郊外型キャンパスに通う学生を対象として，都市計画論文集，第53巻，pp.1215-1222，2007年

施設建設を伴う SDGs モデル事業の実態とその可能性に関する研究

1. 研究の背景と目的

世界中で SDGs が重要視されている。日本では、優れた SDGs の取り組みを提案した市を「SDGs 未来都市」に選定し、その中でも特に優れた提案をした市を「自治体 SDGs モデル事業」に選定している。三重県いなべ市は早くから SDGs に目をつけてまちづくりを行っている。そして 2020 年 7 月に「SDGs 未来都市」及び「自治体 SDGs モデル事業」に選定されている。いなべ市が提案した SDGs は、1つの拠点を定め、そこに SDGs の概念を絡めるといふもので、施設建設を伴う取り組みを行っている。しかし SDGs を取り入れる際に施設建設を伴うまちづくりは、他の「自治体 SDGs モデル事業」と比べてみても珍しいことである。そこで施設建設を伴う SDGs モデル事業はいなべ市にどのような効果をもたらしているかを行政、市民の視点から明らかにする。加えてこの事業の実態の詳細を調査し、SDGs の概念を付与したことで、施設建設を伴うまちづくりの可能性がどのように広がりうるかを考察することを目的とする。

2. 研究の枠組み

2.1 「にぎわいの森」づくりの沿革

「にぎわいの森」は、未整備であった森を整備し、新庁舎に隣接して 2019 年にオープンした。単なる商業施設ではなく、農業振興や生業・就農促進、商業・観光振興、市民協働の促進など、まちづくり、人づくりの拠点として位置づけされた施設である。いなべ市と SDGs と「にぎわいの森」の関わる流れを表したものが図 1 である。2016 年から 2020 年までの 5 年計画であるにぎわいの森活性化計画が 1 年前倒しで新たな 5 年計画である inabe にぎわいプラン the road to 2024 に変更された。変更された理由は、にぎわいの森活性化計画の時点では計画書に SDGs が反映されていなかった。そこで SDGs を反映させるために 1 年前倒しして新たな 5 年計画となる inabe にぎわいプラン the road to 2024 が作られた。

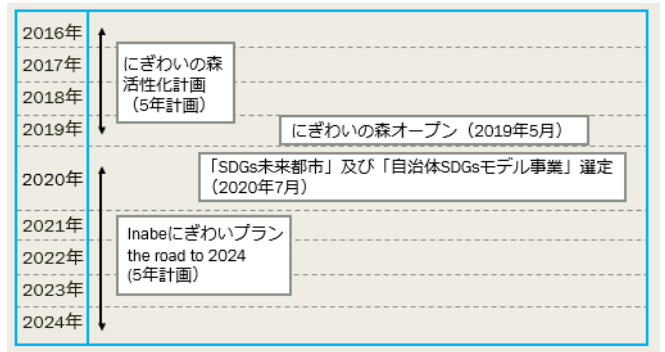


図 1 にぎわいの森の沿革

2.2 いなべ市の「自治体 SDGs モデル事業」

いなべ市が「SDGs 未来都市」及び「自治体 SDGs モデル事業」に選定された際に提案された概要が図 2 である。グリーンインフラ商業施設「にぎわいの森」を先導例として鈴鹿山脈の山辺までの市内広域観光回遊を目指している。SDGs には 17 の目標と 169 のターゲットがある。いなべ市が提案した「自治体 SDGs モデル事業」と関連する目標を表 1 に示す。



図 2 いなべ市の提案概要

(引用：いなべ市ホームページ)

表 1 いなべ市の SDGs に関連する目標

番号	目標
4	質の高い教育をみんなに
6	安全な水とトイレを世界中に
8	働きがいも経済成長も
9	産業と技術革新の基盤をつくる
11	住み続けられるまちづくりを
12	作る責任つかう責任
15	陸の豊かさも守ろう

## 2. 3 研究内容と研究方法

いなべ市が、SDGs を取り入れたグリーンインフラ商業施設「にぎわいの森」をつくる際のそのプロセスを知るため、そして「にぎわいの森」がいなべ市に現時点でもたらしていると考えられる効果についても明らかにするためにいなべ市役所に対してのヒアリング調査と資料調達を行う。実態を知ること、指針や新たな施策を取り入れたまちのつくり方の変化について分かる。なぜなら、にぎわいの森活性化計画時点の「にぎわいの森」づくりは、SDGs について考えられていなかった。しかし新たな計画書である inabe にぎわいプラン the road to 2024 では、「にぎわいの森」づくりを例として、SDGs を取り入れたいなべ市のまちづくりの考え方が明確となった。そこから SDGs という概念が入ったことで SDGs を取り入れたまちづくりの様子が分かるためである。次に、「にぎわいの森」を訪れる人に対してアンケート調査を行う。アンケート調査によりにぎわいの森の役割や、「訪れた人」と「SDGs」と「にぎわいの森」の三者の関係を調査する。

## 3. 「にぎわいの森」づくり

### 3. 1 調査内容・調査方法

「にぎわいの森」がつくられた実態と「にぎわいの森」づくりの目的を探るために、いなべ市役所に対してヒアリング調査と資料調達を行った。調査相手のグリーンクリエイティブいなべは、「にぎわいの森」の運営団体である。

表2 ヒアリング調査概要

調査日	2021年10月25日(月)
調査相手	農林商工部商工観光課 企画部政策課 グリーンクリエイティブいなべ

### 3. 2 調査結果

実際に行ったヒアリング内容が表3である。ヒアリング結果から、にぎわいの森活性化計画では SDGs を視野に入れていなかったが、2018年の施政方針から SDGs を取り入れ、「SDGs 未来都市」を目指した「にぎわいの森」づくりが始まったことが分かる。「にぎわいの森」がグリーンインフラ商業施設ということもあり、コロナの影響を受けにくいことで入込客数に貢献している。

表3 ヒアリング内容

質問1、計画書の変更内容・経緯
回答1、SDGsを反映させるため
質問2、にぎわいの森をつくった経緯
回答2、市内回遊のハブ施設とするため。 2018年の施政方針として「SDGs未来都市」を目指すことを挙げる。 そして「SDGs未来都市」を視野に入れて「にぎわいの森」がオープン。
質問3、にぎわいの森がもたらす影響
回答3、「にぎわいの森」の入込客数は2020年度354624人。いなべ市全体は660359人。
質問4、にぎわいの森の建設費用
回答4、建設費用は5.4億円。合併特例債を用いることにより2/3は市町村にお金を戻す。市が払うお金は実質1/3になる。
質問5、出店舗の家賃
回答5、建設費を30年で割って各家賃を計算している。

### 3. 3 計画書の比較と内容

2016年から2020年予定であったにぎわいの森活性化計画の時点では、SDGsが取り入れられていないこともあり、1年前倒しでSDGsを取り入れた新しい計画である inabe にぎわいプラン road to 2024 に変更された。2016年から2020年予定であった5年計画であるにぎわいの森活性化計画は現在公開されていない。しかし市役所に対するヒアリング調査を行った際に資料を提供してもらった。その内容を表4にまとめる。そしてSDGsが反映された2020年から2024年の5年計画である inabe にぎわいプラン the road to 2024 の内容を表5にまとめる。

表4 SDGs 反映前のにぎわいの森活性化計画

計画書名	にぎわいの森活性化計画
内容	トップクラスのお店をいなべ市に創る。 若者たちにとって可能性のある街。
	にぎわいの森5大効果 ・にぎわい創出 ・人づくり効果 ・農業と商業の活性化 ・就職する若者の定住効果 ・イメージアップ効果
計画	3者(貸す人、借りる人、街)の幸せ 空き店舗施設活用を通じて若者の企業・定住を進める。 いなべ市全体の回遊滞留を進める。
	2016年 基礎から充実 2017年 充実から集大成 2018年 オープン 2019年 持続的インフラ 2020年 にぎわい定着、市全体がブランド化

(「にぎわいの森活性化計画」より作成)

にぎわいの森活性化計画の主な内容としては、「にぎわいの森」の効果や、今後の計画が書かれている。

表5 SDGsを反映した inabe にぎわいプラン the road to 2024

inabe にぎわいプラン the road to 2024	
位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・官民連携によるパートナーシップでクリエイティブな発想のまちづくりを目指す。</li> <li>・にぎわいの森を核とした市内回遊など市全体の活性化を目指す。</li> <li>・SDGsを施策推進のために必要な視点の一つ</li> </ul>
にぎわいの森	単なる商業施設ではなく、SDGs推進農業復興や生業・就農促進、商業・観光振興、市民協働の促進など、まちづくり、人づくりの拠点
課題	1つ目、市内観光回遊 市内全体がにぎわう仕組み 2つ目、農業・商業振興 名古屋等都市圏への販路開拓 3つ目、生業支援、移住促進 若者の夢や希望が叶えられるような総合的な支援 4つ目、市民協働 柔軟な発想による市民協働のまちづくり企画を実行する必要がある 5つ目、持続可能なまちづくり SDGsをグリーンクリエイティブいなべに取り入れる
重要取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・にぎわい創出、市内回遊</li> <li>・地元商品のプロモーション強化、販路開拓</li> <li>・DMO敵機能を備えた地域産業の創出、空き家の解消</li> <li>・官民連携による地域資源を活かしたSDGsの取り組み推進</li> </ul>
目指すまちの姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市外からいなべ市への注目、交流人口増加</li> <li>・地域活性化</li> <li>・雇用増加</li> <li>・まちづくりにおけるダイバーシティの実現</li> <li>・資源が循環できる拠点の整備</li> <li>・いなべ市ならではのビジネスが成立</li> <li>・パートナーシップを重視</li> </ul>
重要取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>・核となるにぎわいの森の入込客数増加</li> <li>・にぎわいの森から市内回遊へとつなげる仕組みづくり</li> <li>・市内移住・出店者の増加</li> <li>・地域商社機能を備え、地元産品の販路を拡大し、商工業を振興</li> <li>・自立自走のまちづくりを実践</li> <li>・移住や空き家の有効活用</li> <li>・地域資源を有効活用し、市内でビジネスの創出</li> </ul>
計画	2020年 地方創生SDGsの基礎構築 2021年 にぎわいの森から市内回遊の定着 2022年 まちづくりの拡大（DMO、地域商社） 2023年 市外へ、世界へ、販路拡大 2024年 にぎわい定着、市全体がブランド化

（「inabe にぎわいプラン the road to 2024」より作成）

表4、表5より、計画書の変更点や追加された点をまとめると、いなべ市の位置づけ、課題、目指すべきまちの姿が明確になった。環境、社会、経済の3側面を統合する施策を推進し、官民連携によるパートナーシップでクリエイティブな発想のまちづくりを目指すことが新たな位置づけとなった。「にぎわいの森」は、にぎわいの森活性化計画時点では人づくりのきっかけ、ローカルセンスなまち、いなべのモデルづくりであったが、inabe にぎわいプラン the road to 2024 ではさらにグリーンインフラ商業施設となり SDGsの拠点施設となった。移住者がカジュアルな店をオープンする、ダイバーシティの実現、地域資源を活かした SDGsの取り組み、そしてにぎわいの森を核とした市内回遊など市全体に対する波及効果がより考えられるようになった。

#### 4. 「にぎわいの森」と人の動向について

##### 4.1 調査内容・調査方法

にぎわいの森を訪れた人に対してアンケート調査を行った。調査概要を表6とする。調査場所は、「にぎわいの森」内の Inabes shop の敷地を借り、すれ違う人に直接声を掛けてアンケートに応じてもらった。

表6 アンケート調査概要

調査日	2021年11月20（土）、12月17日（金）
調査対象	「にぎわいの森」観光客
総数	21件
調査内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢 ・性別 ・来た回数 ・来る目的 ・住んでいる地域</li> <li>・SDGsという言葉を知っているか ・にぎわいの森を知ったきっかけ</li> <li>・「自治体SDGsモデル事業」の認知度 ・市内の他の観光場所に行くか</li> <li>・個人で行っているSDGs ・にぎわいの森の改善点</li> </ul>

##### 4.2 調査結果

アンケート調査の結果を図3から図7とする。図3と図5は複数回答が可能である。

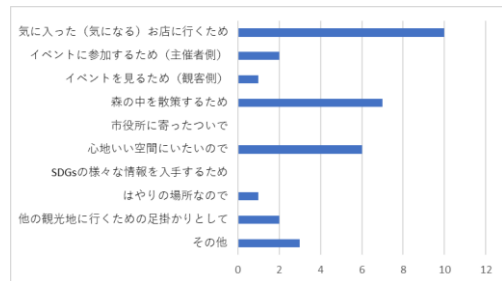


図3 「にぎわいの森」を訪れる目的

図3は、「にぎわいの森」を訪れる目的を調査した結果である。いなべ市のSDGsの核となる「にぎわいの森」ではあるが、調査結果からSDGsについて学ぶために「にぎわいの森」へ訪れる人はいないことが分かる。市役所と併設されているが、「にぎわいの森」単体を目的に訪れる人が多いことも分かる。

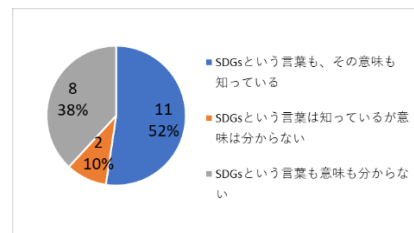


図4 SDGsという言葉の認知度

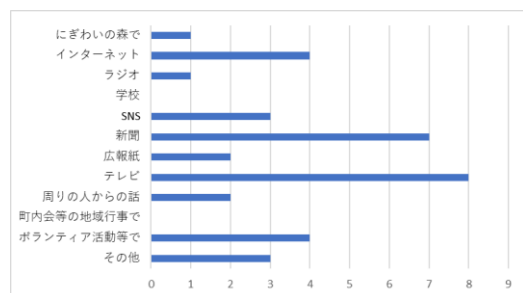


図5 SDGsを知ったきっかけ



図4は、「にぎわいの森」を訪れる人はSDGsという言葉を知っているかを調査した結果である。図5は、SDGsを知ったきっかけを調査した結果である。調査結果から「にぎわいの森」を訪れた半数の人しかSDGsという言葉を知らないことが分かる。「にぎわいの森」はSDGsを知るきっかけにはなっていない。その他の意見では、仕事でSDGsを知ることが多い結果となった。

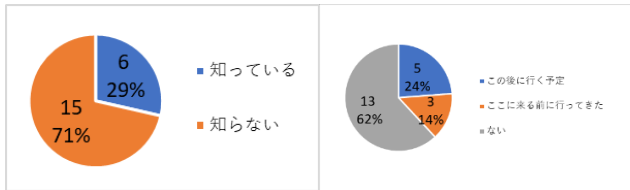


図6 いなべ市のSDGs認知度 図7 市内観光回遊の現状

図6は、いなべ市が「自治体SDGsモデル事業」に選定されたことを知っているかを調査した結果である。結果から、30%しか認知されていない。いなべ市はSDGsに積極的に取り組んでいるが、「にぎわいの森」の観光客は、いなべ市のSDGsについてよく知らないことが分かる。図7は、「にぎわいの森」を訪れた人が他の観光地に行く予定があるかを調べた結果である。この結果より、市内観光回遊の現状は上手くいっていない。

## 5. 考察

SDGsを取り入れるために施設建設を伴うまちづくりの可能性は、あると考える。いなべ市は、自然豊かなことが特徴ではあったが、それを上手に活かしていなかった。そんないなべ市が、SDGsという、大きなアピールできるものを手に入れ、自然とSDGsを絡めたグリーンインフラ商業施設に取り組んだことで観光客が増加したと考える。しかし市民のいなべ市のSDGsに対する認知度は低いことから官民連携を目指すのであれば、市民への普及ができておらずより重要視する必要がある。市内広域観光回遊の現状は不十分である。アンケートの結果からも不十分であることが分かる。現在、「にぎわいの森」を先導例とした山辺までの市内観光回遊は、取り組み途中ということもあり、これが成功すれば観光の選択肢が増える。そしてSDGsの面で見ても、いなべ市全体で取り組めるようになる。もしSDGsという項目が無かった時を想定すると、「にぎわいの森」づくりに

は影響は少ない。しかしその先の「にぎわいの森」を先導例とした市全体への取り組みはSDGsという項目が大きく関わってくると考える。

## 6. まとめ

いなべ市のように、SDGsを取り入れた施設建設を伴うまちづくりを行うのは、他の「自治体SDGsモデル事業」に選定された市町村を見ても珍しいことである。本研究では、そのようなまちづくりの実態や、可能性を評価することを目的に行ってきたが、結果として可能性は大いにありと評価した。ヒアリング調査から「にぎわいの森」づくりの経緯や過程が分かる。アンケート調査では、「にぎわいの森」を訪れる人の動向や意識が分かった。コロナウイルスの影響もあり、観光客が減少しているが、いなべ市の取り組みは自然と絡めた商業施設であるためウイルス環境に左右されにくい。そのため山辺まで観光地が広がれば大きな魅力となる。

## 謝辞

本研究に関わる全ての人に助けてもらいました。ありがとうございました。

## 参考文献

- 1)いなべ市企画部政策課：にぎわいの森活性化計画,いなべ市役所,2016年2月
- 2)いなべ市企画部政策課：inabe にぎわいプラン the road to 2024いなべ市公式ウェブサイト,いなべ市役所,2020年3月  
<https://www.city.inabe.mie.jp/shisei/keikaku/keikaku/1009265.html>, (参照 2021-11-27)
- 3)いなべ市企画部政策課：SDGs 未来都市・自治体SDGsモデル事業に選定|いなべ市公式ウェブサイト,いなべ市役所, 2021-12-8  
<https://www.city.inabe.mie.jp/shisei/keikaku/1008293/1009856.html>, (参照 2021-12-18)
- 4)田辺信宏：SDGsをいかしたまちづくり,日本教育行政学会年報,No45,pp.148-151,2019年

陶磁器産業地域における関連事業所の立地変容に関する研究  
 ～多治見市を事例として～

EC18068 森下 翔太

1. 研究の背景と目的

わが国の地場産業地域は概して衰退が激しい。しかしこのような衰退や人口減少を前提にしつつも、地場産業地域としての魅力を保ち、また地場産業を軸とした新しい産業創出をしやすいするための、生活者の生業、文化、ライフスタイル、コミュニティ特性に基づいた街並み・住環境・土地利用のあるべき空間像構築・計画理論を探求していくことは重要であると考えます。

本研究では、日本三大陶器と言われる焼き物の一つである美濃焼に注目をする。

美濃焼の産地である多治見市・瑞浪市・土岐市・加見市内、多治見市は美濃焼の産地の中でも最も事業所の減少率が高く陶磁器産業の事業所数は1986年では634件あったが2018年では146件になっており488件減少し23.0%しか残っていない<sup>1)</sup>、出荷額では平成3年から平成28年までで169,59百万円減少しており美濃焼産地の中でも最も影響を受けていると思われる。

そして、多治見市のここ10年の詳しい事業所の立地動向の全体像と、景観に影響を与えうる大規模事業所の立地動向を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の枠組み

2.1 対象地域

本研究では、美濃焼の産地である岐阜県多治見市の陶磁器産業の事業所を研究対象とする。

2.2 研究方法

研究方法としては、iタウンページにて2021年度が多治見市の事業所を調べ業種別に分け住所を取り出し、2011年度の事業所データは冊子版のタウンページから取り出した。次に2011年と2021年の事業所が比較できるようにExcelでまとめた。Excelにてまとめた業種別のデータより2011年と2021年の

事業所の変化数を調べた。GISを使用し一目で事業所の場所を分かるようにするために座標をGoogleマップにて1つずつ取り出した。取り出した座標を使用し事業所の場所を業種別や年代別などでGISを使用し示す。GISにて無くなった事業所でのカーネル密度を使用する事により、特に衰退が激しいと思われる地域を見つけカーネル密度が濃い地点の事業所の現在の様子をGoogleマップや住宅地図を使用し様子を調べる。

現在の様子を調べることにより業種別や無くなった事業所が現在どうなっているかの傾向が分かると思われる。

2.3 業種別の分類

業種別の細かい分類。

表1 分類表

業種	種類
製造業	顔料、タイル、窯業原料、電気絶縁材料、ガラス加工、陶芸材料、ガラス工芸（ステンドグラス）、陶磁器上絵付、ガラス食器製造卸、陶磁器製型製版、ガラス製造卸、陶磁器製造、ガラス繊維、配管材料、ガラス容器製造卸、風呂釜浴槽、かわら、理化学機械器具、かわら（家庭用）、匣鉢（こうばち（窯道具））、れんが、白土ベントナイト、衛生設備陶器、築炉工事、酒具、電気炉、七宝焼、窯業機械、食器、手芸品、食器（業務用）、工芸作家、石灰、陶芸家、セラミック製品加工、耐火材料
卸売業	工芸品、陶磁器卸、民芸品、陶芸教室
小売業	陶工芸店、やきもの工芸店、陶磁器店

3. 業種別でのタウンページ上での事業所データ

業種別での事業所の変化はすべての業種で2011年時の70%前後に減少したことが分かる。(表2) 種別に細かく見るとガラス食器製造・卸、陶工芸店・やきもの工芸店の2つが完全になくなった業種であり、窯業原料、陶磁器上絵付、陶磁器製造・製版の3つの減少割合が最も高くこれらは伝統的な陶磁器を作る際に重要とされる業種である。(表3)

表 2 全事業所数の変化

業種別分類	2011年	2021年	減少数	割合
製造業	619	454	165	73%
卸売業	271	190	81	70%
小売業	49	35	14	71%
全事業所	939	679	260	72%

表 3 減少した業種別の細かい分類

業種別分類		2011年	2021年	減少数	割合
製造業	窯業原料	53	22	31	42%
	ガラス食器製造・卸	1	0	1	0%
	れんが	3	2	1	67%
	セラミックス製品・加工	9	8	1	89%
	タイル	237	164	73	69%
	陶芸材料	19	15	4	79%
	陶磁器上絵付	44	22	22	50%
	陶磁器製型・製版	26	15	11	58%
	陶磁器製造	182	113	69	62%
	窯業機械	3	2	1	67%
	陶芸家	10	9	1	90%
耐火材料	11	10	1	91%	
卸売業	陶磁器卸	264	182	82	69%
小売業	陶工芸店・やきもの工芸店	3	0	3	0%
	陶磁器店	46	35	11	76%

4. 多治見市の立地動向

陶磁器産業の事業所の場所を Google マップより座標を取り出し GIS を使用し見ることにより、地域ごとの特色を見つけることが出来た。

製造業は日本有数の陶磁器製造地域である瀬戸市とも近くモザイクタイルを古くから製造してきた笠原地区がとても多いが小売業が1つもないことが分かった。小売・卸売業は JR（中央本線）の多治見駅や国道 19 号線がある多治見市内に数が多いことが分かる。多治見市にある旭ヶ丘地区には陶磁器産業の製造業、卸売業、小売業のすべてや他の業種の工場などが集まっている工場団地がある。

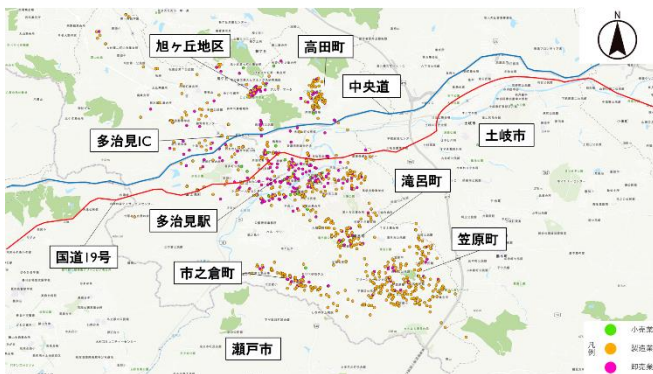


図 1 陶磁器産業系事業所の立地動向(2011年)

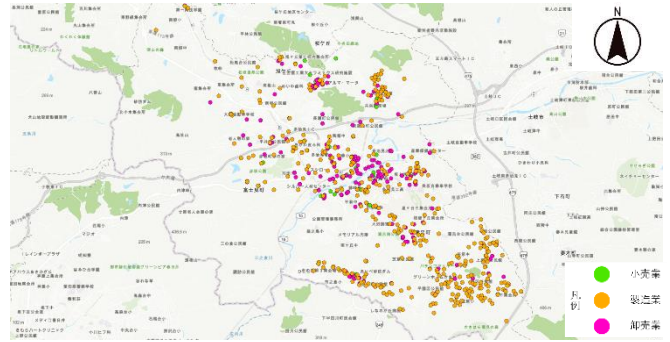


図 2 陶磁器産業系事業所の立地動向(2021年)

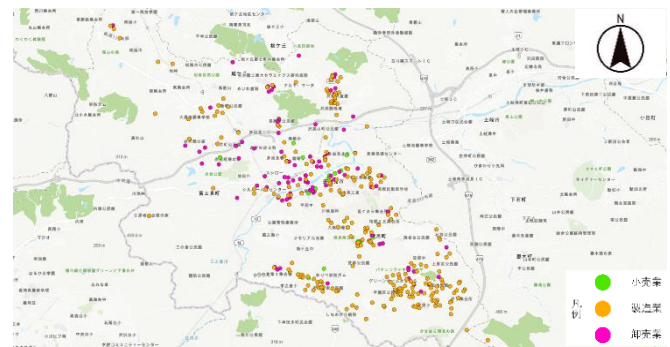


図 3 10年間(2011年～2021年)で減少した事業所の立地動向

4.1 他の陶磁器産業地域との比較<sup>1)</sup>

美濃焼と関係性があり瀬戸焼の産地である、多治見と隣あっている瀬戸市を比較対象とする。

表 4 跡地まとめ

	瀬戸市	多治見市
製造業	古くから陶磁器産業を営んでいた地区や中心市街地	
	市内西部	市内南部
小売業	中心市街地に集中している	
卸売業	古くからの集落ごとにある	土岐川を挟んだ北部を中心に広く分布している

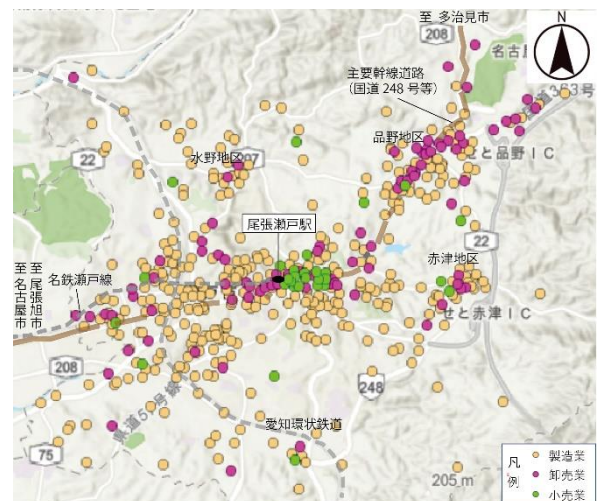


図 4 陶磁器産業系事業所の立地動向 (2011年) 瀬戸市



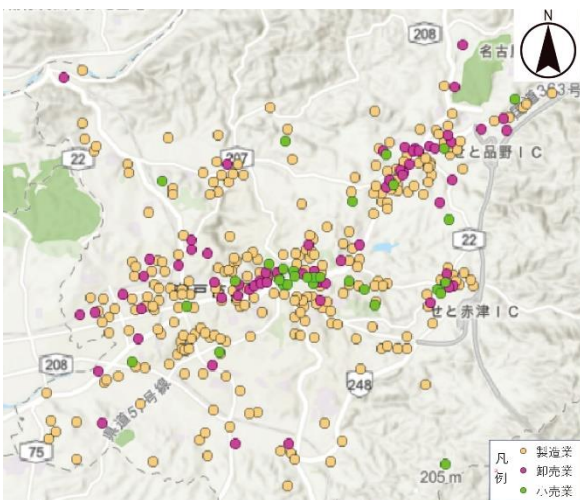


図5 陶磁器産業系事業所の立地動向 (2021年) 瀬戸市

### 5. GIS データ(カーネル密度)

カーネル密度とは、カーネル関数を使用してポイントまたはライン・フィーチャから単位面積ごとの値を計算し、各ポイントまたはラインに滑らかなサーフェスを出力する。サーフェスの値はポイントの位置で最大になり、ポイントから離れるにしたがって小さくなり検索半径で 0 となり、検索範囲を大きくするほど滑らかで単純化されたサーフェスが作成され小さいほど詳細なサーフェスが作成される事である。<sup>2)</sup>

そのカーネル密度を見ることにより、無くなった事業所が多く集まっている為、都市へ多大な影響を与えられていると考えられる地域を知ることができる事や、これから対応すべき地域や陶磁器らしさを保つための優先度をつけるための判断基準ともなる。

図6より笠原町、滝呂町、多治見駅周辺の中心市街地、高田町、市之倉町の5地区のカーネル密度が特に高いことが分かる。よってこの5つの地区は陶磁器産業の衰退が分かる地域であり事業所が無くなることにより陶磁器の街らしさが失われ都市に影響が出ていると考えることが出来る地域である。

また、この5地区の中で特に滝呂町地区はカーネル密度の広がり方が小さいため衰退している事業所がほかの4地区より密集していることが分かる。

5つの地区の中で滝呂町が最も都市に影響を受けていると考えることができる。

その5地区を対象とし事業所の跡地などを見ていくことにより都市全体を知ることができると考える。

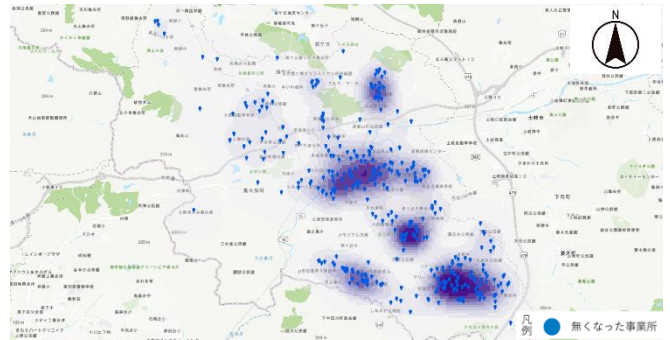


図6 10年間(2011年~2021年)で減少した事業所でのカーネル密度

### 6. カーネル密度より選択した事業所の跡地

#### 6.1 無くなった事業所まとめ

カーネル密度が濃い場所に注目し無くなったと思われる事業所の跡地を Google マップ、住宅地図を使用し調べた。

調べた事業所の数は96個で、事業所の現在の様子としてはその土地でなにかしら営業を続けている事業所が最も多く全体の約47%であった

次に多いのは住宅になった場合で約23%であった。

だが土地が大きい事業所の11事業所に注目すると、違う会社名に変更などがあるが約72%の事業所が名前と土地が残っており営業しているとわかる。都市に大きな影響を与えられると考えられる大きな土地を持つ事業所の大多数は営業していることが分かった。(224㎡以上の建築面積を分析)

多治見市の減少した事業所の特色としては、複数名前が入って営業をしているところや、会社名を変えて営業を続けている場所が多かった。

また、多治見駅周辺の中心市街地に注目すると住宅になった場所では、マンションになった場合が多かった。しかし、郊外に注目すると住宅になった場合ではすべてが一軒家の住宅になっていることが分かった。

表5 カーネル密度より選択した事業所 (96件)

	事業所数	割合
残っている	28	29%
違う会社	17	18%
残っていない		
住宅	22	23%
飲食店	1	1%
空き家	18	19%
空き地	4	4%
不明	6	6%



表 6 大規模事業所 (11 件)

	事業所数	割合
残っている	6	55%
違う会社	2	18%
残っていない		
住宅	1	9%
飲食店	0	0%
空き家	1	9%
空き地	1	9%
不明	0	0%

6.2 GIS データ (無くなった事業所)

無くなった事業所を GIS 上で見ることにより、地域ごとの特徴や傾向が分かる為下記の図 6 にて表した。

それにより市之倉地区では住宅になった場所が 1 か所に密集していることが分かった。多治見駅周辺の中心市街地では空き地になった事業所が存在しなく空き家になっているのも 1 件だけだが笠原町地区では空き家や空き地となっている場所が多いことがわかる。

また、空き家や空き地になった事業所の 9 割程度が中小規模の事業所でありその事業所が密集していることが多く景観や空間的な部分での都市への影響が大きく出ていると考えられる。

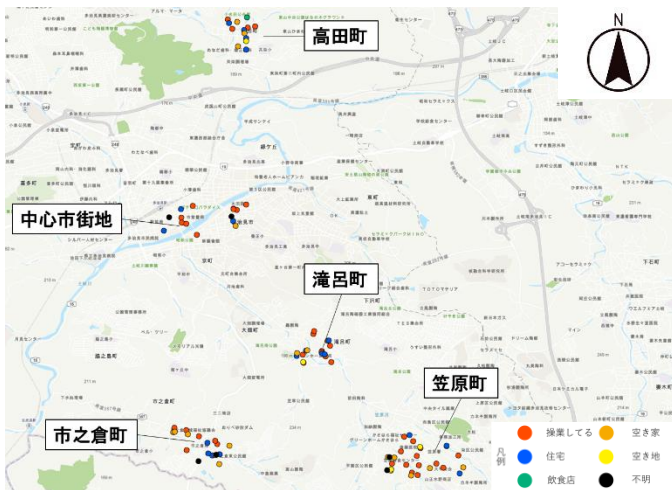


図 7 無くなった事業所の跡地の分布

7. 考察・まとめ

多治見市は笠原地区に製造業、小売・卸売業は JR 多治見駅や国道 19 号線がある地域に多い。また全体的に 30%ほどの事業所がすべての業種でな

くなっていることも多治見市の特色の 1 つである。

また、無くなった事業所の立地変容としては地域別にみると JR (中央本線) の多治見駅周辺の中心市街地では空き家などにはならず住宅だとマンションに土地利用がされているというのが分かった。笠原町地区では無くなった事業所の半数以上が製造業であり空き家になっている場所が多く存在していることが分かった。無くなってしまった事業所すべてが完全に無くなってしまった訳ではなく、違う会社やそのまま営業をしていると思われる事業所が多いことが分かった。

土地が大きい事業所は都市への影響が大きい為重要視されるが、多治見市の土地が大きな事業所の跡地ではより営業を続けている事業所が多いことが分かった為、多治見市では土地が大きな事業所が無くなったことによる都市への影響は少ないものだと考えることが出来る。

しかし、その他の中小規模の事業所に着目をする中心市街地の駅周辺では跡地の有効活用がされており操業している場所でも景観を変えずに操業している場所が多いことが分かった。しかしそれ以外の地域では跡地は住宅になる場合や空き地や住宅になっている場所が多く密集しているため景観的や空間的に都市へ影響が出ており陶磁器の街らしさを失っていること分かる。特に多治見駅周辺などの中心市街地ではなく笠原町や高田町などの郊外にその傾向が大きく出ている事が分かった。

8. 注釈

- 岡本 肇、永野 聡、白井直之:「陶磁器産業衰退期における関連事業所の立地動向と空間的課題に関する考察」: 日本建築学会学術講演梗概集 (都市計画), pp253-254, 2021 年 9 月
- esri ジャパン  
<https://www.esri.com/gis-guide/spatial/density-analysis/>(参照 2022 年 1 月 5 日)

9. 参考文献

- i タウンページ <https://itp.ne.jp/>  
(参照 2021 年 5 月 11 日,12 日,13 日,14 日,16 日)
- ゼンリン電子住宅地図 デジタウン  
岐阜県多治見市 2021 年 7 月発行
- NTT 西日本 デイリータウンページ 岐阜県版(2011 年 11 月)
- NTT 西日本 ビジネスタウンページ 岐阜県版(2011 年 11 月)

2021 年度卒業研究論文概要

陶磁器産業地域における関連事業所の立地動向と利用実態  
～常滑市を事例として～

EC18077 山田竜太

1. 研究の背景と目的

わが国の地場産業地域は衰退が激しい。その中でも、愛知県常滑市の常滑焼は日本六古窯の一つとして 1000 年以上の焼物の歴史を誇っているが、近年、土管や盆栽鉢などを生産してきた旧製陶所の取り壊しが相次いでおり、衰退が特に激しい<sup>1)</sup>。しかしこのような衰退を前提としながらも、常滑市の陶磁器産業地域としての魅力を保ち、陶磁器産業を軸とした新しい産業創出をしやすいするための生活者の生業・文化・ライフスタイル・コミュニティ特性に基づいた街並み・住環境・土地利用のあるべき空間像構築・計画理論を探究していくことは重要であると考えられる。

このようなことから、本研究では団塊の世代の引退に伴う世代交代期である 2011 年～2021 年の常滑市に着目して、ここ 10 年の陶磁器関連事業所の立地動向と利用実態を明らかにすることが目的である。

2. 研究の枠組み

2.1 研究対象の範囲と概要

本研究の対象の範囲は愛知県常滑市である。常滑市は尾張地方で知多半島の西海岸に位置している。焼き物の産地として知られており、瀬戸、信楽、越前、丹波、備前と並び日本六古窯の一つとされ、その中でも最も古く最大の規模とされている。

2.2 研究方法

常滑市の陶磁器関連事業所の立地動向を明らかにするために 2011 年時は冊子版のタウンページより取り出し、2021 年時は職業別電話帳 (i タウンページ) にて事業所の名称、数、住所を取り出し、2011 年時と 2021 年時の比較ができるように業種別に分類し Excel にてまとめる。これらのデータより 2011 年時と 2021 年時の事業所の変化数を調べる。また Google マップより事業所の座標を 1 つずつ取り出して ArcGIS のジオコーディング機能を利用すること

により、2011 年時と 2021 年時の事業所の立地動向を把握する。

さらに ArcGIS を利用して、ここ 10 年で減少した事業所が多い地域を見つけて、その地域に着目して利用実態を現地調査、電話の問い合わせにより把握する。

3. 常滑市の陶磁器関連事業所データ

3.1 事業所データ

団塊の世代の引退に伴う世代交代期であるここ 10 年 (2011 年～2021 年) の変容に着目した。製造業に加えて、卸売業、小売業の陶磁器関連事業所も対象とし、事業所数をカウントした (表 1)。さらに、そこから業種別に分類して細分化することによって事業所の 10 年間の変容を調査した (表 2)。

表 1 より全事業所は 2011 年時の 71% (87 件減少) に減少した可能性があることが明らかになった。また、卸売業が 2011 年時の 89% (4 件減少) に減少しており、多治見市や瀬戸市と比べると割合は高い傾向にあり、他の陶磁器産業地域とは違う傾向が見られた。

表 2 よりさらに細かく見ていくと、製造業の分類のタイルが 2011 年時の 94% (1 件減少) に減少しており、常滑市はタイルの産地として有名なことからあまり減少していないと考えられる。また、卸売業の分類の陶磁器卸、陶芸教室もそれぞれ 2011 年時の 87% (4 件)、100% (0 件) に減少しており、割合が高いことが分かる。常滑市にはセラモール (とこなめ焼卸団地)、やきもの散歩道があり、卸売業がここ 10 年間であまり衰退しておらず、盛んであることが考えられる。

表 1 全事業所数の変容

業種別分類	2011	2021	減少数	割合
製造業	229	159	70	69%
卸売業	38	34	4	89%
小売業	37	24	13	65%
計	304	217	87	71%



表2 減少・変化しなかった業種別の変容

	業種別分類	2011	2021	減少数	割合
製造業	顔料	18	13	5	72%
	ガラス加工	1	0	1	0%
	かわら(家庭用)	2	0	2	0%
	食器	1	1	0	100%
	タイル	16	15	1	94%
	陶磁器製型・製版	9	3	6	33%
	陶磁器製造	147	100	47	68%
	築炉工事	2	0	2	0%
	窯業機械	1	1	0	100%
卸売業	陶磁器卸	30	26	4	87%
	陶芸教室	8	8	0	100%
小売業	陶芸店・やきもの工芸店	11	5	6	45%
	陶磁器店	26	19	7	73%

3.2 事業所の立地動向 (2011年～2021年)

2011年時と2021年時の陶磁器関連事業所の立地動向を把握した(図1、図2)。

製造業は中心市街地(常滑市栄町、常滑駅)を中心にそこから全体的に分布している。卸売業・小売業は中心市街地やセラモールに多く分布している。中心市街地に着目すると、卸売業・小売業は道路沿いに分布している。多治見市と比較をすると、多治見市にも旭ヶ丘地区に製造業、卸売業、小売業が集まっている工場団地があり、常滑市にも同じような場所であるセラモールが存在し、ここでは製造業、卸売業、小売業がそろっていることも明らかになった。このような団地は減少数が少ないことから、別の関連事業所に変容しやすいと考えられる。

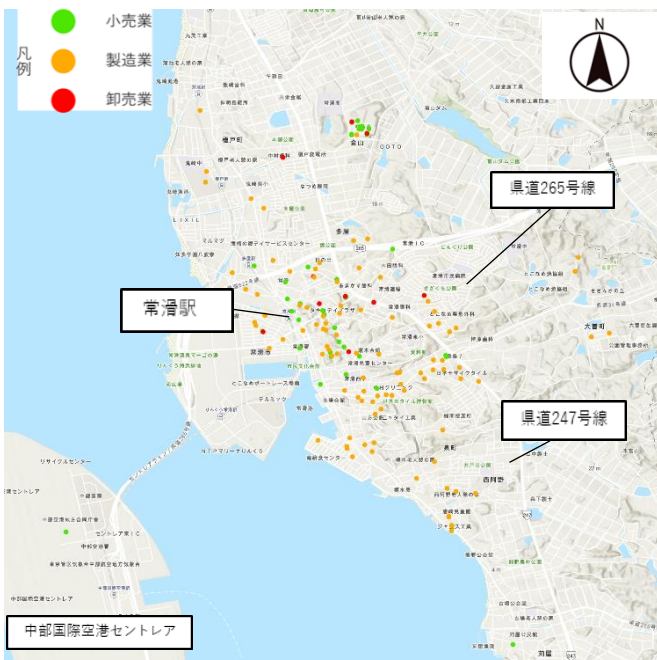


図1 陶磁器関連事業の立地動向 (2011年)

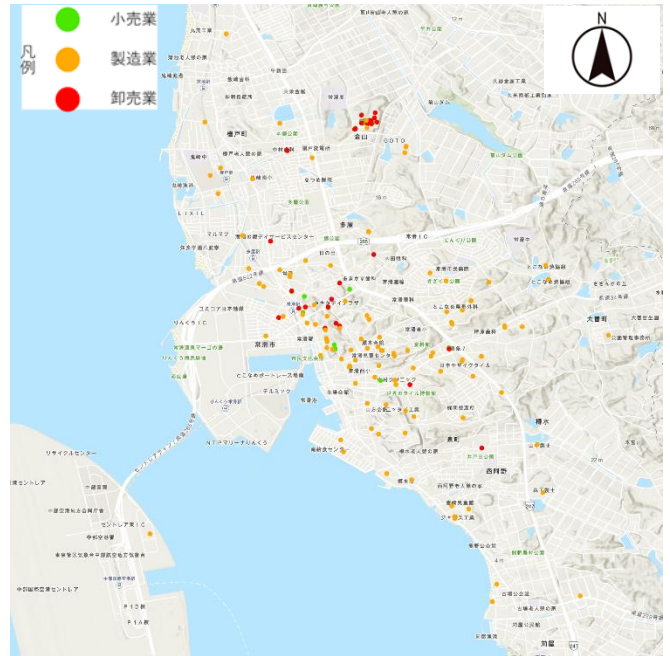


図2 陶磁器関連事業所の立地動向 (2021年)

3.3 減少した事業所の立地動向 (2011年～2021年)

2011年時から2021年時にかけて減少した陶磁器関連事業所の立地動向を把握した(図3)。

図3より製造業を営んでいる事業所がこの10年間で多く減少しており、製造業、卸売業、小売業のどの分類も分布上、どこの場所でも減少していることが分かった。さらに ArcGIS のカーネル密度を地図上に記すことで、ここ10年間で減少した事業所が特に集中している地域が常滑市栄町ということが明らかになった(図4)。

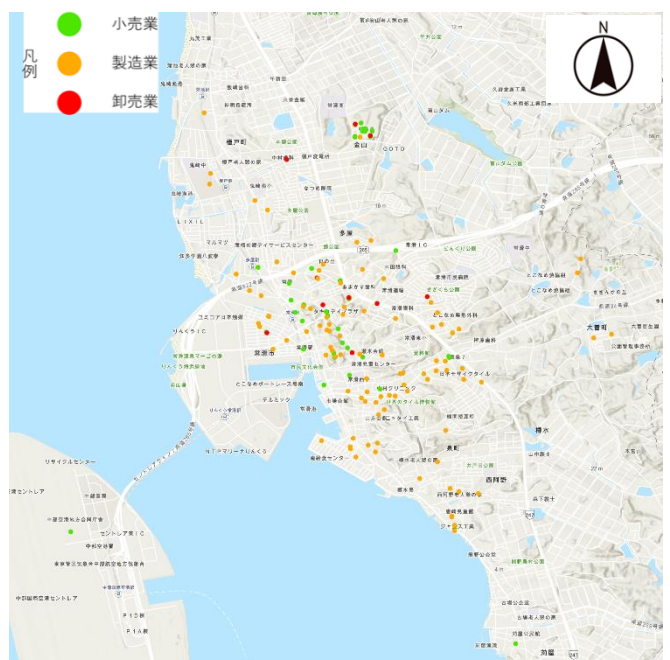


図3 10年間で減少した事業所の立地動向

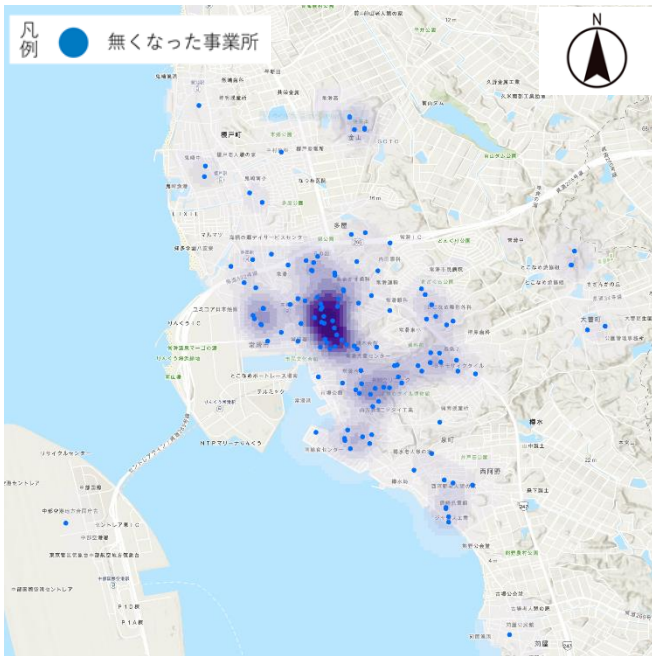


図4 10年間で減少した事業所のカーネル密度

4. 常滑市栄町の調査

4.1 調査地域の範囲と目的

3.3 減少した事業所の立地動向(2011年～2021年)より常滑市栄町に減少した事業所が多く集まっていることが明らかになったため、常滑市栄町を範囲で現地調査を行う。

職業別電話帳(iタウンページ)上から陶磁器関連事業所の名称はなくなっているが、そのまま操業していたり、違う店舗に変わっていたり、完全になくなっていたりと様々な可能性があるので実際に足を運んで写真を撮ったり、電話で問い合わせることで事業所の操業の有無・利活用状況をまとめることで利用実態を把握することを目的とする。

4.2 栄町の無くなった事業所

iタウンページ上より無くなった事業所の名称、住宅地図(2020年6月発行)の記載の有無をまとめた(表3)。

表3より19件の事業所がiタウンページ上より無くなった可能性があることが明らかになった。内訳は、ガラス加工が1件、タイルが1件、陶磁器製造が8件、陶磁器卸が1件、陶芸店・やきもの工芸店が2件、陶磁器店が4件、陶芸家が2件となっていて、陶磁器製造や陶磁器店といった業種が特に多いことが明らかになった。また住宅地図には、11件が記載されていて、8件が記載されていないことが

明らかになった。

表3 栄町の減少したと思われる事業所

業種	事業所	住宅地図
ガラス加工	グラス・ワークス・楽	○
タイル	渡辺接着	○
陶磁器製造	猪飼護	○
	人水陶苑(有)	×
	代忠製陶所	○
	陶陽	○
	松下松長製陶所	○
	松下良一	○
	山文製陶所 工場	○
	有趣陶房	×
陶磁器卸	丸貞片岡製陶	×
陶芸店・やきもの工芸店	あずさ雅の庵	×
	古都里	×
陶磁器店	とこなめ工房	○
	どっかん工房	×
	MA-YU	×
	モリーナ	○
陶芸家	水野静仙	○
	渡辺立広	×
計	19件	

4.3 現地調査

栄町の減少したと思われる事業所(19件)の現地調査を行った。内容としては、現地調査により事業所の操業の有無を調査し撮影をする。それでも判断ができない事業所には電話で問い合わせることにより操業の有無を確認する。

表4 現地調査の概要

日程	10月23日、11月20日、1月15日、1月20日
対象	栄町の減少したと思われる事業所 19件
内容	操業状況の調査(写真、電話での問い合わせ)

4.4 現地調査結果

現地調査の結果は、名称が変わらずそのまま操業しているのが8件、名称が変わって操業しているのが7件、空き工房が3件、マンションに変わっているのが1件という結果になった。名称が変わって操業している事業所の中で工務店として操業している場合や改装してカフェになっている場所もあり、陶磁器には関連していない事業所が7件という結果



になった(表5、表6、表7)。

5. 考察・結論

常滑市では10年間で多くの陶磁器関連事業所が減少している可能性があることが明らかになった。また常滑市栄町に着目すると、減少したと思われる事業所は空き工房、マンションになっている場所があり、さらには工務店、カフェといった陶磁器関連ではない店になっている場所が合わせて11件あることが明らかになった。しかしカフェや工務店などは、事業内容は違うが、陶磁器産業地域としての名残を感じることができるよう景観設計されており、魅力を保っていると感じた。また操業していない事業所は、4件の内3件が空き工房となっているが、現在でも建物は残っているので、今後の利活用によっては陶磁器産業地域として可能性がある

考える。

7. 注釈

1) 中日新聞 「失われる陶都の風景」の記事より一部抜粋(参照 6月11日)

8. 参考文献

1) 岡本肇, 永野聡, 白井直之 「陶磁器産業衰退期における関連事業所の立地動向と空間的課題に関する考察」, 2021年9月, 日本建築学会学術講演梗概集(都市計画), pp.253-254

2) 常滑市ホームページ

[www.city.tokoname.aichi.jp/](http://www.city.tokoname.aichi.jp/) (参照 2021年11月28日)

3) iタウンページ

<https://itp.ne.jp/> (参照 2021年5月13日)

4) NTT西日本『ビジネス タウンページ 愛知県版'11.8』(2011年)

5) NTT西日本『デイリー タウンページ 愛知県版'11.8』(2011年)

6) ゼンリン電子住宅地図 デジタウン 愛知県常滑市 2020年6月発行

表5 操業している事業所(名称変わらない)

事業所	操業状況
▶ガラス・ワークス・楽▶渡辺接着▶猪飼護▶人水陶苑 ▶代忠製陶所▶山文製陶所 工場▶モリーナ▶水野静仙	○

表6 操業している事業所(名称が変わっている)









事業所	操業状況	写真
松下松長製陶所 ↓ 陶浜八	○	
あずさ雅の庵 ↓ 一心窯	○	
古都里 ↓ ギャラリー NaNaMa	○	
とこなめ工房 ↓ 陶磁器会館	○	

表7 操業していない事業所

事業所	操業状況	写真
陶陽	×(空き工房)	
松下良一	×(空き工房)	
丸貞片岡製陶	×(マンション)	
渡辺立広	×(空き工房)	

## “公園都市”としての魅力向上に関する研究 ～各務原市における住民評価調査を通じて～

EC18079 横山 民斗

### 1. 研究の背景と目的

「歩いているだけでまるで公園の中にいるかのように緑の豊かさを感じることができるまち」と定義されている<sup>1)</sup>“公園都市”を目指してきた各務原市(以下「本市」)の都市づくりは、2009年に開催された「住みよい都市づくり国際コンクール」で世界第3位という成績を取っており、国際的にも高い評価を受けている。そのため、今後も“公園都市”に代表されるまちとして持続的に発展し続けていくことが求められている。

また、本市は現在、市全体が公園であるかのようなまちを目指しているが、市内全ての緑を整備することは実際には難しく、重点的なアプローチがされてきた。そして、優先して緑が整備されてきた場所を利用する人は市民の中でも一部であり、自宅とその付近のみで生活している人は多いと言える。特に新型コロナウイルスの影響により、この傾向がより一層強くなった<sup>2)</sup>。したがって、住民が日常生活において緑を魅力的に感じられるようにすることが理想の公園都市に近づくために目指すべき姿であると考えられる。しかし、現在の本市が住民にとって高く評価される都市であるのかについて説明するためには具体性に欠けている。

本研究では、各務原市の住民が自宅周辺の緑に対してどのように感じているのか調査することで、“公園都市”として魅力を向上させるための方向性を探ることを目的とする。

### 2. 研究の枠組み

#### 2.1. 対象地域の概要

各務原市は岐阜県の南部に位置しており、木曽川が東西に県境となって流れている都市である。本市は平成13年より公園都市づくりを目指してたくさんの公園をつくり、現在は188か所の都市公園が存在している。また、市全体が公園であるかのようなまちを実現に向けて、日本一の総延長を誇る31kmの桜並木を整備してきた。なかでも新境川堤の桜は「日本さくら名所100選」に選ばれている<sup>1)</sup>。

緑地率は28%、1人当たりの公園面積は16.36m<sup>2</sup>と

いった緑地確保状況である。

#### 2.2. 研究方法

まず、本市における公園都市づくりの概要を把握した後、Arc GIS Proを用いて整備実態にもとづいた市内の緑地の分布を把握する空間分析を行った。

また、Arc GIS Proを利用して住民評価が高いと思われる地域を仮定した後、アンケート調査によって、果たして本当にその地域が住民にとって“公園都市”として高く評価されているのかについて明らかにした。その後、調査の結果をグラフに表すことで分析を行った。

### 3. 整備実態に基づいた空間分析

#### 3.1. 住区基幹公園の配置

本市の整備実態を把握するために、統計資料をもとに市内全ての都市公園の位置を確認した。また、公園整備が進んでいる地域と進んでいない地域を把握するために、都市公園のうち住区基幹公園のみを抽出した。地区公園、近隣公園、街区公園それぞれの誘致距離をもとにArc GIS Proを用いてバッファ(指定した距離にもとづいて作成した範囲エリア)を作成し、公園整備の実態を把握した(図1)。中心市街地を含む那加地区と東部の鵜沼地区を中心に公園が集まっている傾向がみられた。

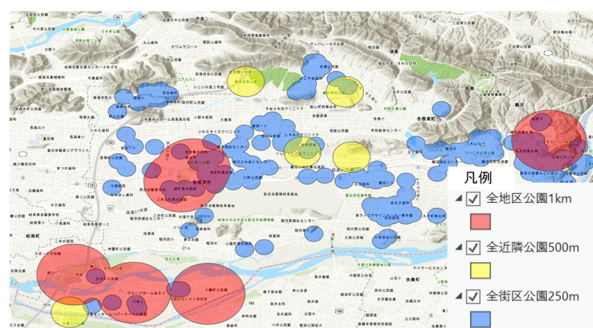


図1 住区基幹公園の配置とバッファ

#### 3.2. アンケート調査の対象地域

本市の公園都市づくりは市全体が公園であるかのようなまちを目指している。言い換えると、市内いつ



どこにいても緑が感じられるようにすることを目標としている。そのため、日常生活で緑を魅力的に感じているべきだと考える地域を対象としてアンケートを行う。本研究では、具体的に「用途地域であること」、「DID 地区であること」、「公園が近くにあること」を条件として対象地域を絞った。

まず、国土数値情報の用途地域と DID のデータを用いて該当範囲を把握した。また、都市公園の機能を最大限に発揮させるために定められている誘致距離<sup>3)</sup>をもとに Arc GIS Pro でバッファを作成し、公園が十分に整備されている地域を把握した。これらの結果をもとにインターセクト（重なる部分を抽出する機能）を用いて、条件に該当する地域を解析した（図2）。解析結果をもとにアンケート調査の対象地域を「那加雄飛ヶ丘町」、「つつじが丘」に設定した。つつじが丘については、市役所と自治会長に許可を頂いた4丁目、6丁目、8丁目のみを対象とする。

そして、これらの地域を対象としてアンケート調査を行うが、アンケートで得られた評価の特徴とそれぞれの対象地域の空間的特徴は互いに影響し合うため、各地域の空間的特徴を捉えて比較することは重要であると考え。そのため、現地へ向かい、写真を撮影するとともに空間的な特徴を整理した（表1、写真1、写真2）。那加雄飛ヶ丘町は平坦になっていなのに対し、つつじが丘は全域で起伏のある場所が多いことなどにおいて空間的特徴が異なった。また、各対象地域の様子を Google Map の航空写真で把握した（写真3、写真4）。

表1 対象地の様子と空間的特徴

那加雄飛ヶ丘町	つつじが丘
	
<ul style="list-style-type: none"> <li>平坦になっている</li> <li>つつじが丘に比べ道幅が狭い</li> <li>付近に学びの森(4)が存在する</li> <li>付近に中心市街地が存在する</li> <li>集合住宅がある(6付近)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>起伏がある</li> <li>開放的な景観である</li> <li>付近に山が存在する</li> <li>池が複数存在する(新池、つつじヶ丘公園(3)内の池など)</li> </ul>



写真3 那加雄飛ヶ丘町の航空写真



写真4 つつじが丘の航空写真

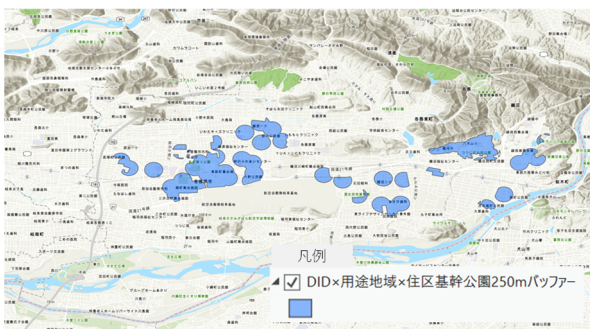


図2 対象地設定条件をもとにして解析した範囲



写真1 那加雄飛ヶ丘町の様子



写真2 つつじが丘の様子

## 4.住民評価調査

### 4.1.アンケート調査の概要

“公園都市”としての評価を確認するため、那加雄飛ヶ丘町とつつじが丘に住む方にアンケートを行った（表2）。那加雄飛ヶ丘町は依頼数660件のうち回答数51件で回答率は7%、つつじが丘は依頼数419件のうち回答数96件で回答率は22%であり、合計147件の回答を得た。また、「市全体が公園のような空間であるか」が確認できる質問を作成した（図3）。

表2 アンケート調査の概要

場所	那加雄飛ヶ丘町	つつじが丘
日時	2022/12/8(水)~2022/12/22(水)	2022/12/6(月)~2022/12/20(月)
対象者	那加雄飛ヶ丘町に住む方	つつじが丘町2、4、6丁目に住む方
調査方法	ポスティング形式（回答用紙または、用紙に記載のQRコードから回答）	

図3 アンケート調査の質問項目

<ul style="list-style-type: none"> <li>性別</li> <li>年齢</li> <li>職業</li> <li>日中の自宅滞在時間（平日・土日）</li> <li>テレワークの頻度</li> <li>公園の利用頻度</li> <li>複数の公園利用の有無</li> <li>最も利用する公園</li> <li>公園への所要時間</li> <li>公園への移動手段</li> <li>最も自然を感じる場所</li> <li>自然物が与える安らぎ</li> <li>街路樹景観の満足度</li> <li>住宅の樹木・生け垣の景観の満足度</li> <li>自然を求める場面</li> <li>自然物がつくる景観に満足する時期</li> <li>散歩の頻度</li> <li>散歩の目的</li> <li>歩くときに感じる魅力</li> <li>歩くときに感じる不安</li> <li>快適で歩きやすいと感じるか</li> <li>歩きやすく快適に感じる時期</li> <li>コロナによる自然の感じ方の変化</li> <li>最も自然と触れ合う時期</li> <li>公園都市の認知</li> <li>緑のまちづくりに関するボランティアへの参加</li> <li>緑のまちづくりに関して気になること</li> </ul>
---

### 4.2. アンケート回答者の特徴と公園の利用実態

アンケートの回答者は、調査対象とした2地域いづれにおいても平日は9～12時間家に滞在している方が多かった(図4)。3時間～6時間滞在している方と6時間～9時間滞在している方については同程度の回答人数であった。

那加雄飛ヶ丘町においては雄飛ヶ丘公園、つつじヶ丘においてはつつじヶ丘公園が頻りに利用されていることが分かった(表3)。逆に、桜町第3公園、不動丘公園、入会公園や、八木山公園、つつじヶ丘北公園、つつじヶ丘東公園については最も利用する公園としてほとんど選択されていなかった。

公園を利用する方の中で複数の公園を利用している方は2割程度であり、それ以外の8割の方は1か所の公園のみ利用していることが分かった(図5)。

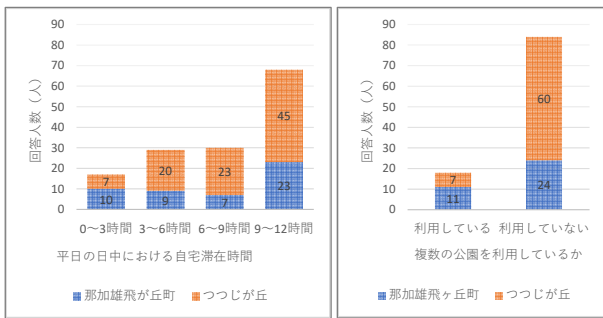


図4 平日の日中における自宅の滞在時間 図5 複数の公園を利用しているか

表3 最も利用する公園について(公園の番号は表1に基づく)

那加雄飛ヶ丘町付近の公園		つつじヶ丘付近の公園	
1.桜町第3公園	2	1.八木山公園	1
2.不動丘公園	2	2.つつじヶ丘北公園	0
3.入会公園	1	3.つつじヶ丘公園	34
4.学びの森	6	4.つつじヶ丘東公園	2
5.雄飛ヶ丘公園	13	5.つつじヶ丘西公園	5
6.雄飛ヶ丘第一住宅広場	4	6.つつじヶ丘南公園	13

### 4.3. 住民評価の特徴

アンケート調査の対象とした2地域の合計件数を調査したところ、対象地を歩くときに歩道が整備されていること、車があまり通らないことに魅力を感じている方が多く、特に安全性に関する選択肢が多く選ばれていた(図6)。次いで、会話の場であることや日陰があること、多様な生物がいることを魅力に感じる方が多かった。

逆に歩くときに不安に思う点については、不安はないと回答する方が多くみられた(図7)。このことから、快適に歩くことができている様子をうかがうことができる。しかし、隠れられる場所の存在や人通

りの少ない場所の存在、見通しの悪さによる交通事故、老木化や強風による倒木、害虫による不快感を挙げられる方も一定数みられた。

また、最も緑を感じる場所については、公園、山、街路樹と回答する方の割合が高く、神社と回答した方も一定数みられた(図8)。次いで、神社、戸建て住宅の樹木、戸建て住宅の生け垣などに緑を感じている方が多かった。

自由記入欄に回答していただいた中で特に多かったものは、落葉樹に関する問題点やその管理に関する問題点であった(表4)。

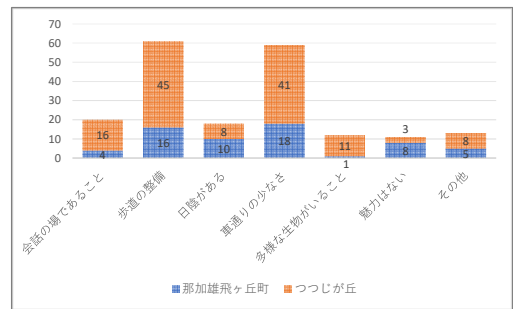


図6 歩くときに感じる魅力

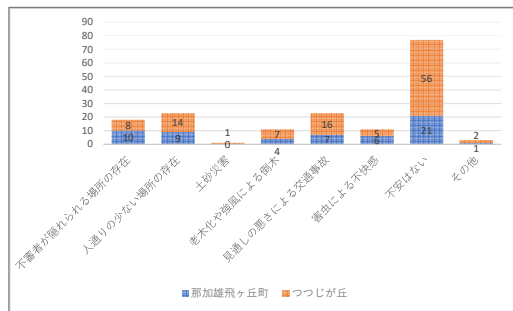


図7 歩くときに感じる不安

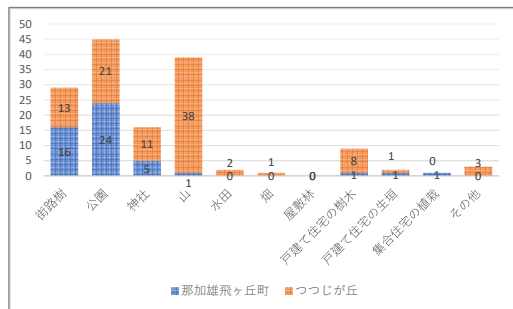


図8 最も緑を感じる場所

表4 「緑のまちづくり」について気になる点

那加雄飛ヶ丘町	つつじヶ丘
・落葉の掃除が大変(3人)	・落葉樹が多い(3人)
・街路樹が危険(3人)	・管理が大変(3人)
・公園の整備が不十分(2人) (芝が生えすぎている)	・街路樹は必要ない(2人)



## 5. 考察

### 5.1. 住民評価の分析

住宅の樹木や生け垣がつくる景観への満足度調査において「満足している」「少し満足している」と回答した方の割合は、那加雄飛ヶ丘町では3割であったのに対し、つつじヶ丘では6割であり満足度が高かった(図9)。また、街路樹の景観についての質問でも同じようにつつじヶ丘の満足度が高いという結果が得られた(図10)。したがって、つつじヶ丘の方が公園都市づくりにおいて重要である公園と公園をつなぐ空間の景観に対して住民の満足度が高いと言える。また、つつじヶ丘の方が自宅付近を快適に感じており、散歩している方の割合も高かった。このような歩き心地に関する満足度は景観に関する満足度と関連付けることができると考えられる。

最も緑を感じる場所について地域別で見ると、那加雄飛ヶ丘町は山であると回答した方が多いのに対し、つつじヶ丘は公園と回答した方が最も多かった。このことから、山が近くにある場合は山に最も緑を感じやすく、ない場合は公園に最も緑を感じやすいことが考えられる。

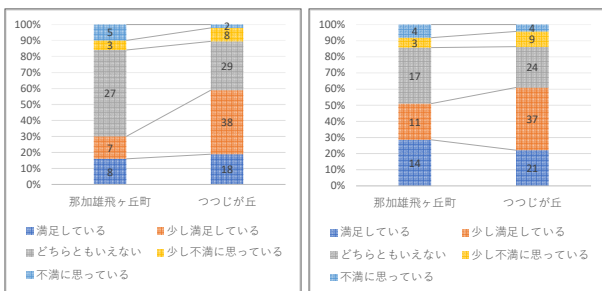


図9 住宅の樹木や生け垣の景観の満足度

図10 街路樹の景観の満足度

### 5.2. 住民評価と空間的特徴との関係性

アンケート調査の中で那加雄飛ヶ丘町の方が公園を複数利用している方の割合が高いことが明らかになった。このことから、那加雄飛ヶ丘町にはつつじヶ丘とは異なる魅力的な空間的な特徴がみられることが推測できる。公園を複数利用する方が多かったのは、現地調査で捉えた特徴の中でも特に平たんになっていることや、市を代表するような主要な公園が存在していることに起因していると考えられる。

また、本研究のアンケート調査の対象である2地域は、本市が計画として緑のネットワーク化を進めてきた道路が存在する地域であるため、複数の公園を利用する行動は今後の目指していくべき姿であると考えられる。

また、調査対象の2地域を比べると、つつじヶ丘の方が総合的に満足度の高い印象が見受けられた。これは、つつじヶ丘の道幅が広く居心地が良いと考えられることや、起伏が多く健康な生活を送るために魅力的な空間であることに起因していると考えられる。

## 6. 結論

各務原市は「水と緑の回廊計画」などによって“公園都市”の実現を目指してきた。本研究では各務原市の対象地域でアンケート調査を行うことで公園利用の状況や住民評価に関するデータを得た。そこから明らかになった課題は見つめ直すべき点である。特に、まちを歩くときに不安に思う点の中で回答者が多くみられた「不審者が隠れられる場所の存在」や「見通しの悪さによる交通事故」については、自由回答欄の「街路樹が危険」や「街路樹は必要ない」などの意見と共通する問題点であり、魅力ある“公園都市”として今後も発展していくための課題であると言える。

また、住民は街路樹や公園に強く緑を感じていることから、行政で管理している場所が住民評価に与える影響は大きいと言える。そのため、本市が“公園都市”としての魅力を向上させるには行政のアプローチが重要であると考えられる。街路樹や公園においては、適切に維持管理をしていくことで魅力向上につながると考える。そして、行政で管理していない私有地においては、住民への意識づけによって魅力を向上させられると考える。

## 謝辞

アンケート調査を行うに当たり各務原市役所まちづくり推進課、那加雄飛ヶ丘町とつつじヶ丘の自治会長の皆様に関わっていただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 各務原市役所：公園都市各務原、各務原市公式ウェブサイト 2021-02-12、<https://www.city.kakamigahara.lg.jp/> (参照 2021-11-3)
- 2) 尾谷 悠介、嶽山 洋志、山本 聡、薬師寺 恒治、中瀬 勲：都市公園における新型コロナウイルス感染症の流行が公園利用に及ぼす影響、日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集、18巻、p1~4、2020  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/cpijkansai/18/0/18\\_1/\\_article-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/cpijkansai/18/0/18_1/_article-char/ja/) (参照 2021-08-03)
- 3) 国土交通省都市局：都市公園法運用指針の改定、2018-03、<https://www.mlit.go.jp/crd/park/joho/houritsu/pdf/H290615shinkyu.pdf> (参照 2021-9-16)

津波被害想定が大きい地域の防災意識に関する研究  
 ～豊橋市神野新田町五号町を事例として～

EC18082 渡邊公基

1. 研究の背景と目的

南海トラフ巨大地震は 30 年以内に 70～80%の確率で発生すると考えられていて、最大でマグニチュード9クラスの地震、最大30mを超える巨大津波が押し寄せると予測されている。このような南海トラフ巨大地震からの被害を軽減させて、少しでも多くの人を守るために対策をして備える必要がある。また、高齢者や障害者など、災害時に支援が必要な「避難行動要支援者」の名簿の作成が義務化され、「個別避難計画」の重要性が高まっている。今回の研究では、津波浸水被害想定が大きい地域の住民の防災意識とその意識を形成する要因を明らかにすることを目的とし、今後の対策のあり方に役立てる。

2. 研究の枠組み

2.1 対象地域

本研究では、津波到達時間が9分と1番速く、津波浸水被害想定が大きい地域の豊橋市神野新田町五号町を対象とする。対象地は77世帯から形成されていて農業振興地域である。似たような地域が全国各地でも存在すると予測する。図1は対象地を表したものである。

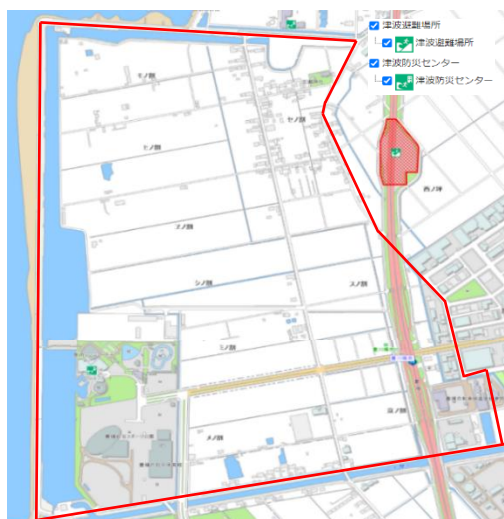


図1 豊橋市神野新田町五号町

2.2 研究方法

研究方法としては、豊橋市市役所と打ち合わせをし、対象地で災害対策を行っている自治会長とコンタクトを取った。2021年9月30日に自治会長にヒアリング調査を行い、その後、対象地の77世帯の住民にポスティングでアンケート調査を行った。調査期間としては、配布日を2021年10月13日、回収日を2021年10月27日に設定した。その結果から津波浸水被害想定が大きい地域の防災意識を分析する。さらに、防災意識が低いと予想されている若い年代(20～30代)とそれ以外の年代の防災意識の違いを比較し、防災意識の問題点を明らかにする。

3. 調査結果

3.1 ヒアリング調査

自治会長にヒアリング調査を行うことは対象地の住民の特徴、地域の特徴、避難訓練の実施の現状、地域の過去の災害、自治会長自身の意見を明らかにすることを目的としている。表1は自治会長に行ったヒアリング調査結果をまとめたものである。

表1 ヒアリング調査

2021年9月30日 五号町自治会長	
質問項目	回答
住民の特徴	ほとんどは昔から住んでいる住人が多い。
地域の特徴	農業振興地域であり、海岸堤防がある。
避難訓練の実施	新型コロナの影響で避難訓練の実施が出来ていない。
地域の過去の災害	台風被害や液状化被害も大きい地域でもある。 ここ最近では、大きな地震が起きていない地域である。
自治会長の意見	自治会長は、自分の家の物や生き物が大切に避難しない。 海岸堤防が強化されたため安全だと思う。

3.2 アンケート調査結果

表2は今回のアンケート調査で作成したアンケート調査用紙の内容である。この31問の設問から地域住民の特色、災害危機管理能力、防災・減災対策の意欲、共助の意識に関係のある以下の問11をピックアップし、若い年代とそれ以外の年代で比較をして分析を行った。

表2 アンケート内容

問1. 性別	問17. 津波災害を含めた防災・減災対策 (複数選択可)
問2. 年齢	問18. 対策をされていない理由 (複数選択可)
問3. 家族に20代の有無	問19. 自宅以外の場所への避難対策 (複数選択可)
問4. 家族に高齢者 (65歳以上) の有無	問20. 避難場所や津波避難ビルの認知
問5. 家族に災害時に1人で避難が困難な何らかの障害を持っている方の有無	問21. 普段の防災や災害に関する情報を得る手段 (複数選択可)
問6. 職業	問22. 緊急時の防災や災害に関する情報を得る手段 (複数選択可)
問7. 居住地の選択理由 (複数選択可)	問23. 災害ボランティアの参加の有無
問8. いっしょから神野新田町に住んでいるか	問24. 今後災害ボランティアに参加したいか
問9. 育った地域	問25. 1人で避難が困難な方がいる場所の有無
問10. 以前住んでいた地域	問26. 普段のコミュニティ活動や自治会活動に参加の有無
問11. 最も長く居住していた地域	問27. 避難するためのインフラが整備されていると思うか
問12. 引っ越しを考えたか	問28. 避難場所や避難経路の不満
問13. 居住地域が津波災害に対して安全か	問29. 不満足
問14. 安全安全と思うか	問30. 豊橋市総合防災訓練の参加の有無
問15. 安全確認方法を述べているか	問31. その他、行政・自治会に要望事項
問16. 安全確認方法 (複数選択可)	

1) 回答者の属性

表3は回答者の属性を表している。77世帯中39件のアンケートを回収し、内訳は若い年代は6件、それ以外の年代は33件である。アンケートの回収率は50.6%であり、若い年代もそれ以外の年代も男性の回答者が多い。

表3 回答者の属性

性別	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
男性	4	67%	23	70%
女性	2	33%	10	30%
合計	6	100%	33	100%

2) 職業

表4は回答者の職業を年代別に比較したものである。若い年代は会社員の回答者が3件で1番多い。学生が2件、公務員が1件いる。自営業、専業主婦、農業従事者、アルバイト、その他の回答者はいない。それ以外の年代は農業従事者の回答者が12件で1番多い。自営業が8件、会社員、専業主婦、その他が4件ずついる。アルバイトが1件いる。公務員、学生の回答者はいない。

表4 職業

職業	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
会社員	3	50%	4	12%
自営業	0	0%	8	24%
公務員	1	17%	0	0%
専業主婦	0	0%	4	12%
農業従事者	0	0%	12	36%
アルバイト	0	0%	1	3%
学生	2	33%	0	0%
その他	0	0%	4	12%

3) 居住地の選択理由 (複数選択可)

表5は回答者の居住地の選択理由を年代別で比較したものである。若い年代は出身地であるという回

答者が6件で1番多い。親、兄弟が近くに住んでいるが1件いる。それ以外の年代も出身地であるという回答者が27件で1番多い。その他が7件、地価が安い、景観が良い、地価が安い、利便性が良い、周辺環境が良い、子育て環境が良い、福祉や介護の環境が良い、親、兄弟が近くに住んでいる、親戚が近くに住んでいるが1件ずついる。

表5 居住地の選択理由

居住地の選択理由	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
出身地である	6	100%	27	82%
仕事の都合上	0	0%	0	0%
景観が良い	0	0%	1	3%
地価が安い	0	0%	2	6%
利便性が良い	0	0%	0	0%
周辺環境が良い	0	0%	0	0%
子育て環境が良い	0	0%	1	3%
福祉や介護の環境が良い	0	0%	0	0%
親、兄弟が近くに住んでいる	1	17%	1	3%
親戚が近くに住んでいる	0	0%	1	3%
コミュニティが形成されている	0	0%	0	0%
その他	0	0%	7	21%

4) 育った地域

表6は回答者の育った地域を年代別に比較したものである。若い年代は豊橋市神野新田町の回答者が6件いる。それ以外の年代は豊橋市神野新田町の回答者が26件で1番多い。豊橋市清洲町、豊橋市老津町、豊橋市菰口町、豊橋市牟呂町、豊橋市向山西町、新城市中宇利、豊川市一宮町が1件ずついる。

表6 育った地域

育った地域	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
豊橋市神野新田町	6	100%	26	79%
豊橋市清洲町	0	0%	1	3%
豊橋市老津町	0	0%	1	3%
豊橋市菰口町	0	0%	1	3%
豊橋市牟呂町	0	0%	1	3%
豊橋市向山西町	0	0%	1	3%
新城市中宇利	0	0%	1	3%
豊川市一宮町	0	0%	1	3%

5) 居住地は津波災害に対して安全か

表7は居住地が津波災害に対して安全かという問を年代別に比較したものである。若い年代は危険だと思うの回答者が4件で1番多い。やや危険だと思うが2件いる。やや安全だと思う、とても安全だと思う、分からないという回答者はいない。それ以外の年代も危険だと思うという回答者が19件で1番多い。やや危険だと思うが12件、やや安全だと思う

が2件いる。とても安全だと思う、分からないという回答者はいない。

表7 居住地は津波災害に対して安全か

居住地は津波災害に対して安全か	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
とても安全だと思う	0	0%	0	0%
やや安全だと思う	0	0%	2	6%
やや危険だと思う	2	33%	12	36%
危険だと思う	4	67%	19	58%
分からない	0	0%	0	0%

6) 引っ越しを考えているか

表8は回答者が引っ越しを考えているかを年代別に比較したものである。若い年代は考えてはいるが可能性がある、永住するつもりという回答者が3件ずついる。具体的に考えている、したいが具体的には考えていない、分からないという回答者はいない。それ以外の年代は永住するつもりで19件で1番多い。考えてはいるが可能性があるが5件、したいが具体的には考えていないが4件、分からないが3件、具体的に考えているが2件いる。

表8 引っ越しを考えているか

引っ越しを考えているか	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
具体的に考えている	0	0%	2	6%
したいが具体的に考えていない	0	0%	4	12%
考えてはいるが可能性がある	3	50%	5	15%
永住するつもりである	3	50%	19	58%
分からない	0	0%	3	9%

7) 安否確認方法を決めているか

表9は回答者が安否確認方法を決めているかを年代別に比較したものである。若い年代はあまり決めていないという回答者が6件いる。全く決めていない、決めている、具体的に決めているという回答者はいない。それ以外の年代もあまり決めていないという回答者が20件で1番多い。全く決めていないが11件、決めているが2件、具体的に決めているという回答者はいない。

表9 安否確認方法を決めているか

安否確認方法を決めているか	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
具体的に決めている	0	0%	0	0%
決めている	0	0%	2	6%
あまり決めていない	6	100%	20	61%
全く決めていない	0	0%	11	33%

8) 津波災害を含めた防災・減災対策(複数選択)

表10は回答者の津波災害を含めた防災・減災対策を年代別に比較したものである。若い年代は非常

用食品などの備蓄、避難場所・経路の確認をするという回答者が4件ずついる。ハザードマップの確認、家具などの転倒、落下防止策、家族間での連絡方法の確認、消防団・自主防災組織の活動や地元で行われる防災訓練等の参加、特に対策していないが1件ずついる。それ以外の年代は避難場所、経路の確認をするという回答者が12件で1番多い。非常用食品などの備蓄、消防団・自主防災組織の活動や地元で行われる防災訓練等の参加、特に対策していないが11件ずついる。寝室に懐中電灯やスリッパ等を用意が7件、家具などの転倒・落下防止が6件、ハザードマップの確認が4件、家族間での連絡方法の確認が3件、その他が1件いる。

表10 津波災害を含めた防災・減災対策

津波災害を含めた防災・減災対策	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
非常用食品などの備蓄	4	67%	11	33%
避難場所、経路の確認	4	67%	12	36%
ハザードマップの確認	1	17%	4	12%
寝室に懐中電灯やスリッパ等を用意	0	0%	7	21%
家具などの転倒、落下防止策	1	17%	6	18%
家族間での連絡方法の確認	1	17%	3	9%
消防団・自主防災組織の活動や地元で行われる防災訓練等の参加	1	17%	11	33%
特に対策していない	1	17%	11	33%
その他	0	0%	1	3%

9) 今後災害ボランティアの参加したいか

表12は回答者が今後災害ボランティアに参加したいかを年代別に比較したものである。若い年代はやや参加したくないという回答者が3件で1番多い。参加したくないが2件、やや参加したいが1件いる。参加したいという回答者はいない。それ以外の年代はやや参加したいという回答者が17件で1番多い。参加したくないが12件、やや参加したくないが3件、参加したいが1件いる。

表12 今後災害ボランティアに参加したいか

今後災害ボランティアの参加したいか	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
参加したい	0	0%	1	3%
やや参加したい	1	17%	17	52%
やや参加したくない	3	50%	3	9%
参加したくない	2	33%	12	36%

10) 豊橋市総合防災訓練の参加の有無

表13は回答者が豊橋市総合防災訓練に参加しているかを年代別に比較したものである。若い年代は参加していないという回答者が6件いる。参加している、ほとんど参加している、たまに参加している、あまり参加していないという回答者はいない。それ以外の年代はたまに参加しているという回答者が



15 件で 1 番多い。参加していないが 11 件、参加しているが 4 件、あまり参加していないが 3 件いる。ほとんど参加しているという回答者はいない。

表 13 豊橋市総合防災訓練の参加の有無

豊橋市総合防災訓練の参加の有無	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
参加している	0	0%	4	12%
ほとんど参加している	0	0%	0	0%
たまに参加している	0	0%	15	45%
あまり参加していない	0	0%	3	9%
参加していない	6	100%	11	33%

#### 11) 1 人で避難が困難な方がいる場所の把握

表 14 は回答者が 1 人で避難が困難な方がいる場所の把握をしているかを年代別に比較したものである。若い年代は把握していないという回答者が 6 件いる。把握している、大体把握している、少し把握しているという回答者はいない。それ以外の年代は把握していないという回答者が 13 件で 1 番多い。少し把握しているが 11 件、大体把握しているが 5 件、把握しているが 4 件いる。

表 14 1 人で避難が困難な方がいる場所の把握

1人で避難が困難な方がいる場所の把握	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
把握している	0	0%	4	12%
大体把握している	0	0%	5	15%
少し把握している	0	0%	11	33%
把握していない	6	100%	13	39%

#### 12) 普段のコミュニティ活動や自治会活動への参加

表 14 は回答者が普段のコミュニティ活動や自治会活動に参加しているかを年代別に比較したものである。若い年代はあまり参加していないという回答者が 5 件で 1 番多い。たまに参加しているが 1 件いる。参加している、ほとんど参加している、参加していないという回答者はいない。それ以外の年代はたまに参加しているという回答者が 14 件で 1 番多い。参加しているが 10 件、あまり参加していないが 6 件、参加していないが 3 件、ほとんど参加しているが 1 件いる。

普段のコミュニティ活動や自治会活動への参加

普段のコミュニティ活動や自治会活動に参加の有無	若い年代	割合	それ以外の年代	割合
参加している	0	0%	10	30%
ほとんど参加している	0	0%	1	3%
たまに参加している	1	17%	14	42%
あまり参加していない	5	83%	6	18%
参加していない	0	0%	3	9%

#### 4. 考察とまとめ

本研究では、津波浸水被害想定が大きい地域の防災意識の現状が分かった。この地域で危険だと感じながら住み続けている理由としては、若い年代は育った地域であり、それ以外の年代は農業従事者が多いため容易に地域から離れることが出来ないことが考えられる。危険と感じながら住んでいる住民が多いが、津波被害に対してあまり対策をしていない住民も多いことが分かった。若い年代に限らず、地域全体の防災意識が低いことが分かった。これらの理由としては、この地域では大きな地震が起きていないことが要因であると考えられる。津波被害を軽減させる共助の面では、若い年代が中心となって動くことが大切であるが、この地域では、若い年代の居住地が一極集中している部分があると考えられ、さらに若い年代の回答者は、どこに一人で避難が困難な方が住んでいるか把握していない回答者が多いため、共助の面が弱いと考えられる。また、今後災害ボランティアに参加したいかという問に対しては、参加する意欲が低く、防災訓練の参加率も低いことが分かった。それ以外の年代は参加の意欲が高く、若い年代の共助の意識の低さが目立つ。これらのことから、共助の強化という面では、特に若い年代の防災意識の向上が必要不可欠である。防災意識の向上に加え、若い年代の居住地を地域に分散させる必要がある。津波災害を含めた防災・減災対策の間に対しては、若い年代もそれ以外の年代もハザードマップの確認を行っている回答者が圧倒的に少ない。また、避難場所に不満を持っている住民もいるので、避難場所の設備、避難場所の数を増やすなどの改善をすることも必要である。さらに、個別避難計画の作成をし、ソフト対策のハザードマップと合わせて住民に共有することで、津波被害の軽減に役立てることができると考える。

#### 参考文献

- 1) 福田清乃, 村尾 修, 熊谷良雄: 水害常襲地域における住民の防災意識の風化に関する研究, 地域安全学会梗概集, No.12, pp.35-38, 2002 年 11 月
- 2) 豊橋市ホームページ: 防災危機管理課, 防災マップ (ハザードマップ), ちずみる豊橋  
<https://www2.wagmap.jp/toyohashi/G0303A> (参照 2022-01-06)